Re:ゼロから帰ってきた異世界人～Parallel・The・Walking・Dead～

伊吹香恋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔女教徒との戦いが終わり全てが終わったろ思った。

が、ナツキ・スバルは突如自分の元の世界に戻っていた。そこに待ち受けていたのは崩壊した自分が住んでいた街だった。

※この作品はＲｅ：ゼロから始める異世界生活とＴｈａ・Ｗａｌｋｉｎｇ・Ｄｅａｄのクロスオーバー作品です。

目次

プロローグ「終わりの始まり」 1
1話「世界の崩壊」 17
2話「戦闘開始」 28
3話「人間として」 38
4話「シビレさせたのは誰？」 53
5話「開戦」 66
6話「憎悪」 80
7話「敵」 90
8話「死に戻りと籠城戦」 102
ナツキ・ミツル プロフィール 116
番外編
番外編「ゲーム実況（キャラ崩壊）」 120
番外編「ゲーム実況（キャラ崩壊）」その2 128
リゼロデッド×銀魂的お話し 134
9話「メトロ」 147

プロローグ「終わりの始まり」

男が戦う理由なんてちっぽけなもんだ。そのちっぽけな理由に命をかけれるというのはある意味狂気の沙汰ではない。ある者は金のため、ある者は栄光の為、ある者は、愛する者の為、色々だ。

死に戻り、ナツキ・スバルはある日異世界に召喚された。そこで多くの者と出会い、多くのものを愛し、多くの死を迎えた。時には立ち止まり、下を向き続け、絶望した。だがそんな絶望を彼は彼を愛している者達が支え、乗り切ってきた。彼は抗うことをやめなかった。どれだけ絶望を受けようが、彼は抗い続けた。運命に。

だが、それも終わりを迎えた。

日本の東京。日本国内で1番の都市。そこにはナツキ・スバルが生まれたとこであり、育った家があり、育ててくれた両親があり、共に育った兄弟がいた。

「何だよ、これ・・・」

ナツキ・スバルが目を開け見た光景は以前スバルが済んでいた故郷だった。そしてそ

こはスバルが異世界に行く前の街。だが、そこはこの世になるものとは思えないものだった。崩れた家、血で汚れたアスファルト、腐って白骨化した人が入っている車の中、その肉が腐った見た目通りの腐臭がスバルの鼻を突く。同時にわき上がる強烈な吐き気を止めることも出来ず、口から胃の中にある液体を吐き出し、アスファルトにぶちまけた。

「う゛・・・う゛ぇ・・・」

まるでこの世にはスバルしかいないかのように周りは静かだった。

胃の中にあるものをぶちまけ、口を拭い立ち上がるスバル。

「そうだ、み、みんなは・・・！」

異様な光景で周りが見えていなかったが、さっきまでスバルはエミリア達と一緒に居た。だが、周りを見渡すがそこには誰もいなかった。さっきまでスバルは白鯨を討伐した地でエミリア達の再会に喜んでいた。魔女教徒を倒し、どうにも出来ない運命からようやく抜け出した後だった。自分以外は何も無い。孤独だけが彼を包み込んだ。

「そうだ・・・！ここが日本なら、俺んちが・・・!!」

今居るところがスバルが異世界に召喚された場所と同じなら、スバルの家はそう遠くない。スバルは異様な光景を目にしながら走り出す。曲がり角を曲がり、生まれてからいつも通った自宅の道を進んでいく。

「・・・!!」

だが、そこにあったのは、ボロボロになった我が家だった。玄関は開いており、中はひどい有様だった。散らかされた衣服や家具、割れた窓ガラス、その全てがまるで別世界に飛ばされたような感じがスバルを襲った。

「な、何なんだよ・・・これ・・・!父さん・・・!母さん・・・!兄貴・・・!」

弱々しく声を出すがそこには何も返ってこなかった。ただただ静寂だけがスバルを包むのだ。

スバルは散らかったリビングにあるボロボロになったソファに腰掛ける。悪い夢を見ている様に顔を両手で覆う。頭を何度か手で叩いてみるがこれは夢では無く現実だった。そして孤独の末耐えきれずに目から涙がこぼれ落ちる。

「何で・・・何で戻って来ちまったんだ・・・!エミリア・・・!レム・・・!みんな・・・!!」

ただ誰も居ない家の中でスバルは一人涙を流し続けた。

時を同じくして

1人の青年が大きなリュックを背負い、腰にはマチェットを腰に差し、大きな銃を手に持っていた。青年は長い髪を後にして前髪をオールバックにしている。目はまるで

犯罪者のような目付きの悪さをしている。
　青年はボロボロの車のボンネットを開ける。だが中身は何も無かった。ご丁寧にエンジンまで全部を取られていた。青年は「チッ」と小さく舌打ちをし乱暴にボンネットを閉める。中身は何も無いことを知ると青年は再び歩み始める。
「どこも同じような感じだな･･･」
　リュックから水の入ったペットボトルを手に取り中に入っている水を口に含む。
　バタリ･･･
　何かが倒れる音がした。その音を聞き青年は反射的に銃を構える。音が聞こえたのは人が二人ほど入れる小さな道だった。青年はそのまま銃を構えたままその道を見続ける。だが、いつまでたってもその道から何かが出る気配も無ければその倒れる音以外に何も聞こえなくなった。
　ここで何も見ないことにして先に進むのもいいだろう。だが危険だと分かっていてもその音が何なのか好奇心が出てくるのは人間としての本能なのか、世界が変わろうとそれは変わりないらしい。青年は壁に身を置きカバーしながら道を覗き見る。周りは陽が当たるような道じゃない上に天気はどんより曇りがかった空になっているためか先が見えない。
「はぁー･･･　すうううっ」

深呼吸をしてカバーを外し銃に付いているライトを付け辺りを確認する。
「・・・ん？」
ふと彼は足元にある物をライトで照らした。暗く良く見えていなかったらしく、そこには青い短めの髪をしたメイド服の少女がいた。
青年はすぐに銃を背負い直し、その少女を抱き起こす。
「おい、おいしっかりしろ！」
「うう・・・」
小さくだが声を出した少女に青年は安堵した。だがそれと同時に青年にある疑問が湧いた。
「この子、どこから来たんだ？」
こんな辺鄙な何にもない場所で一人で何をしていたのか…それは今の青年には分からなかった。そしてこの少女の格好がまた青年の疑心を呼び出す。見た目もそうだがこんなところに何故メイドなぞが居るのか、そもそもこのメイドはどこから来たのか分からなかった。
と言っても、ここでこの少女を置いていくのも気が引ける。後味が悪いと言うやつだ。青年は少女が起きるまで休める所を探すためリュックを前に背負い直し少女を背中で背負い歩み始める。

「スバル・・・くん」
「なにっ?」
寝言なのか、少女の口から出てきた名前。それは青年にとって大きな、重大なことだった。だがそれ以降も少女はその一言以外に口を開くこともなく、寝息を立てながら眠っていた。
「昴・・・お前は何処にいるんだ?」
雲で濁ったような色をした空を仰ぎ見ながら青年は少女を運んだ。

スバルは家から出て空を仰ぎ見ながら誰もいない、自分だけしかいないような世界に絶望し続けていた。だが不思議なこともあった。
これだけ世界が変わっているにも関わらず、家の中の衣服は殆ど持っていかれてる。そしてもうひとつ不思議なこともあった。それは家にある家族の写真やアルバムがなくなっていた。強盗があったとしても、強盗がアルバムを持っていくか?いや、そんなはずはない。単に金目の物目当てならアルバムなんてなんの意味もないのだから、スバルは思った。

「(どこかで家族は生きている・・・)」

そんな淡い希望に縋りながら立ち上がるスバル。だがもうひとつの不安要素がある。それはこの世界に戻ってきた時に見た車の中にあった死体だった。死んでから結構たっているであろう。あの死体は頭蓋が浮き出る程だ白骨化が進んでいた。しかも死体はあちらこちらにあるにも関わらず、死体の数はこの街の人口と一致しないし数が少なすぎる。

スバルが異世界に来た時期は1ヶ月半程だ。だがこの変わりようは何なのか、一体何が起きたのかが分からなかった。

「くっそ!なんでこうなっちまったんだ・・・」

ぺた・・・ぺた・・・。

ふと耳をすましてみると何かがこちらに近づく音がした。

「何だ?」

ぺた・・・ぺた・・・。

その音は次第に大きくなっている。まるで素足で道路を歩いているような音が・・・。

「生きてる人か!?」

スバルはすぐにその場から音のする方向に向かって駆け出す。

「(生きてる人が居ればこの街の現状が分かるハズだ!)」

さっきまでの孤独感から解放される喜びによりスバルは全速力で駆け出す。生きているなら家族の居場所も分かるはずだ。心の重圧から解放を望んだスバル。

だが、その希望は無残にも崩されてしまう。

「えっ？」

そこに居たのは――――――

腹から臓物をぶら下げ、肉が腐り落ちそうな身体をした人間（化け物）だった。

その人間（化け物）はスバルに気づくと肉が腐り墜ちた唇が無く、黒ずんだ鋭い歯を見せながら

獣のように呻いていた。

「そ、そんな・・・！」

恐怖により、スバルは足がすくんだ。やっと会えると思えた生きた人間がこの世とも思えないものに成っていたのだ。そして先ほどスバルが目にしたもの、鼻が覚えた臭いが鼻をさした。

腐臭。肉が腐り、今にも吐きそうな激臭。スバルは理解した。

この人、腐ってもなお動いている。死んでいるのだと。

「（逃げないと！逃げないと！逃げないと！逃げないと！）」

さもなくば・・・

喰われる。

思考が危険モードに入りやっと足が動くようになる。後ろを向いて来た道を戻ろう。そう思い身体を後ろに向かせた。

だが、

「え・・・・・・」

後ろを向くとそこには別の腐った死体が立っていた。同じように歯をむき出しにして。

「うわあああぁぁぁ!!」

驚いたあまりにスバルは足下を崩し尻餅をつく。そして目の前の化け物はそんな倒れたスバルに食らいつこうと手を伸ばす。

「(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない!!)」

死の恐怖が目の前にやって来ている。

「(来るな来るな来るな来るな来るな来るな!!助けてくれ!!)」

「ぬおおぉぉぉあ!!」

ザシュッ!!

スバルの顔に何か液体のような物が付く。だが、それはスバルの物では無かった。何故なら身体に痛みが走らなかったのだから。

次の瞬間、ベチャリと何か液体が付いた物が墜ちる音が耳に入った。スバルは目を開

く。

そこに居たのは、血の付いたマチェットを持ったオールバックの男だった。その男のことをスバルは良く知っていた。というか忘れられるハズが無かった。そのオールバックの髪も、自分と同じよう目つきにも、自分と殆ど同じ顔も。

「あ、に、き・・・?」

「お前・・・昴か?」

「昴!お前無事だったのか!?というかお前その姿・・・!」

青年は弟であるスバルの元に駆け寄り様子を見る。スバルは驚きのあまりなのか、それとも恐怖がまだ残っているのか、涙を流し続けた。

「兄貴!満(ミツル)兄ちゃん!!」

スバルはやっと生きている人間に会えた。しかもその人物は自分の肉親。スバルの壊れかけそうな心をミツルと言われる青年が守った。

スバルは大粒の涙を流しながらミツルの足にしがみつく。そしてスバルはもう一つ

の事に気がつく。
「レム・・・！」
　ミツルが背負っている短めの青い髪をしたメイド服の少女だった。
「レム！レム!!」
「大丈夫だ昴！噛まれてねえし気絶してるだけだ」
「そうか・・・よかった・・・」
「安全な所、と言いたいところだが、先に邪魔者を始末する・・・この子を見てやれ・・・」
　ミツルは背に背負っていたレムをスバルに託し、リュックを地面に置いた。そしてマチェットを構え直し立ち上がる。
「兄貴・・・？何を・・・」
「殺すんだよ・・・この醜い化け物を・・・」
　獲物を求める獣のボロボロの服を掴み、地面に倒しそのまま足で押さえ地面に付かせる。
　マチェットを逆手に持ち、そのマチェットを頭に向かって突き刺した。化け物の腕は力がなくなっていき地面に付く。それは化け物が死んだという合図であった。
　血しぶきが顔に付く。そしてその手に持っているマチェットを抜き、もう一度刺す。顔を、服を、手を血に染め、何度も何度も何度も何度も何度も何度も刃を死体に突き刺

した。
　まるで憂さ晴らしをするように、子供が何も考えず蟻を踏みつけるように無表情で何度も刺す。
「兄貴・・・？」
　死体の頭をぐちゃぐちゃにし終わるとミツルは血まみれの姿のまま二人の元に戻る。
「・・・さあ、安全な所に行くぞ。この街は・・・いやこの国は、なにぶん危険でしか無いからな」

　スバルたちは家に戻りあまり荒らされていない部屋のベットをいくらか整頓させその上にレムを寝かせていた。
　それから1時間後レムは目を覚ました。
「・・・スバル君？」
「レム！よかった・・・」
　スバルは安堵して胸をなで下ろした。そしてレムの視線はその横に居る青年に向く。

「・・・スバル君が・・・二人？」
「あぁ・・・この人は俺の兄貴だ。俺達二人を救ってくれたんだ」
「スバル君の、お兄様ですか？」
　ミツルは血の付いた顔をタオルで拭き取り、レムの前にたつ。
「初めまして。昴の兄の菜月満だ。よろしく」
「こ、こちらこそ！よろしくお願いしますお義兄さん」
「レムさん？ニュアンスが何か違う気がするんですけど!?」
　などとスバルはレムにツッコミをしているが話が先に進みそうに無いのでミツルはゴホンと咳払いをする。
「早速で悪いが君たちの事は我が愚弟から聴いた」
「兄貴!?久しぶりに会ったのに何か辛辣過ぎない!?」
「こんな奴のどこに惚れたのかよく分からんが、それでも君はスバルを救い、慕い続けた。兄として礼を言う。ありがとう」
　ミツルはレムに一礼をする。
「い、いえいえ！救われたのはレムの方です。今のレムがいるのはスバル君のおかげです」
　レムは起き上がりミツルと同じように一礼する。

それを見たミツルは次にスバルを睨む。
「……」
「な、何だよ兄貴」
「いや、お前の優柔不断さに呆れただけだ」
「ど、どういう意味だよそれ！」
「さあな、自分で考えてみろ…　レムちゃん。良かったらこの愚弟の嫁に来ないか？」
「兄貴!?」
「ありがたいお言葉です。だけどスバル君には既に心に決めたお人がいますので、それでもレムはスバル君が好きです。だからレムは2番目です」
「…　英雄色を好むと言うが、俺らの世界からしたらただの節操無しにしか聞こえねえな…」
「やっぱり何か俺に対して辛辣ゥ！」
レムが目を覚ましたという事もあり、ミツルたちは話をする為に1階のリビングにあるソファに座る。ミツルは対面にあるソファに座っているスバル達に水の入ったペットボトルを差し出す。スバルたちはそれを手にして飲む。途中レムがペットボトルの開け方がわからなかったらしく、スバルが丁寧に開け方を教えていた。その姿はミツルから見たら初々しいカップルのようにしか見えなかった。

「さて、君たちの事は昴から聞いた。異世界・・・・　と言っても帰ってきたスバルやレムちゃんからしたらここも異世界のようなものか」

ミツルは懐から1本タバコを出し口にくわえる。

「結論から言わせてもらうと、世界は、崩壊した。」

これは始まりに過ぎない。異世界から帰ってきた異世界人（スバル）はこの地獄のような世界に生き残るべく、抗い続ける。それは長く、とてつもない道のり。絶望しかないこの世界でスバルは何を見つけ、何を得るのか、それは神のみぞ知る話だ。

1話「世界の崩壊」

少年ナツキ・スバルは自分の生まれ故郷に帰ってきた。そこはかつて彼が住んでいた街とは程遠いぐらいに荒廃し、荒れた地になっていた。まるで戦争後の世界みたいに。

そこで出会ったのはナツキ・スバルの実兄のナツキ・ミツルだった。

「どこから話せばいいのか…あれは5年前の事だ。俺は弟の昴の行方を探すべくあらゆる手段で昴を探した。街の人間の情報収集、警察、情報屋、裏社会の住人まで情報をかき集めた。だがその行動は僅か半年で終わった。ネットである噂が流れ出したんだ」

「あれ？5年前って、スバル君がこの世界からレムたちの世界に来ていたのは・・・」

「一ヶ月ちょい前だ」

そう、この荒廃した世界はスバルが異世界に渡って戻るまでの間に5年もの月日が流れていた。

「なぜ一ヶ月前ぐらいに居なくなったスバルが5年後のこの世界に戻ってきたのかそれは俺にもわからん。だがそれは君らの異世界生活の話を信じさせるものだ。人間なんて5年もすれば外見は変わる。特にこんな荒廃した世界ならな」

確かにとスバルは思った。スバルが異世界に来る前のミツルは髭も無く、髪も短かっ

た。だが一ヶ月もしたらここまで窶れたような顔をして無精髭や髪が長くなる物なのか？いや、スバルの知っている兄は少なくとも清潔を保つきれい好きだったはずだ。それがここまで小汚い格好をしているのが信じられなかった。
「話を戻そうか・・・ネットで流れていた噂はこうだ・・・
『死んだ人間が生き返る』
　まるでホラー映画だ。奴らは本能のまま動いている。理性は無く、ただ満たされない欲求『食欲』を満たす為に奴らは俺達生きた生物を喰らいつくそうとしている。そして奴らに噛まれた奴らはもれなく奴らの仲間入りする。奴らの出所は不明だ・・・というか出所は俺達の身体の中にある」
「それは、どういう意味ですか？」
　レムの問いかけにミツルは煙草の火を握りつぶす。
「俺達は・・・みんな感染している」
「えっ？」
　スバルは驚きを隠しきれなかった。感染している。先ほどのミツルの話しによれば奴らに噛まれれば奴らの仲間入りをする。だがミツルにはそんな外傷が見つからない。レムを背負ってここまで運んでいた時も噛まれたような所は見当たらなかった。
「で、でも兄貴は噛まれてないじゃないか！感染してるって事は、兄貴もいずれ、奴らの

ように・・・」

「違う。確かに俺達は感染している。だがだはそれは今どうこうなる問題じゃ無いんだよ。奴らの出所は俺達の身体の中に潜伏してる。だから死んだ時、俺達は奴らになる。人間は些細なことでも死ぬ。病気、事故、殺人色々だ。だから俺も死ねば奴らになるし、噛まれれば短時間で奴らになる。それはお前らも同じだ。お前らが今この状態で感染しているのかどうかは知らん。だが噛まれれば同じ事だ。理性無く、ただ肉をむさぼり喰らう腐った肉袋になり損なう。だが俺はそんなこと絶対させない。お前らをこの命に代えても守る。それが俺の、兄貴の役目だ」

ミツルの話が終わる頃には空は暗くなっていた。夜の活動は危険極まりないというミツルの意見でスバルたちはこのボロボロの家で1夜泊まることになった。破られているドア簡単なバリケードを作り、奴らが簡単に入れないようにしている。

夜は缶詰腹を満たし、灯りは蝋燭の火で照らした。既に寝ている2人を起こさないようにリビングの隅っこで銃を弄っている。

「・・ 願わくば、2人を元の世界に戻してやりたい」

ミツルの願いはとんでもない所で叶った。スバルをこの目でもう一度見たい。だが

生きているということはこの地獄を生きていかなければならないということだ。それは一緒にいるレムも同じだ。レムの戦闘力はスバルから聞かされている。鬼の一族の生き残り。角が出現したレムは強い。実際に見た訳では無いものの、いざ戦いになれば見ることは出来る。だがそれでもミツルの中には不安でしかない。

　果たして2人は生き残ることが出来るのか。

「いや、生き残らせるんだ。俺の命に変えても…」

　決意を新たに固めてミツルは銃のマガジンを銃に込めた。

「スバル君のお兄様?」

　ふとミツルに声をかけてくる優しい声。スバルとソファで寝ていたレムが起きて来た。

「すまない。起こしてしまったか」

　リュックを開けてその中から銃の弾が入った箱と空になっているマガジンを出す。

「何をなさっているのですか?」

「明日の準備だ。よく言うだろ、備えあれば憂いなしって」

「ですが、休める時に休むのも大事だと思いますが・・・」

「確かに、その通りだ」

　弾をマガジンに込めながらミツルはレムを見る。本当に見た目に反する力をこの少

女が持っているのかと。
　メイドという割には若く、幼さが残ったその見た目。だがスバルの話だと鎖付きのモーニングスターで何度もスバルを助けてくれたらしい。
「レムちゃんは、なんでスバルが好きなんだ?」
　カチッと弾丸の入ったマガジンがフル装填である事を確認しながらミツルはレムに問いかける。
「…スバル君は、レムの止まった時を動かしてくれました。レムはレムであることを思い出させてくれて、生きる理由をくれました。レムにとってスバル君は、英雄なんです」
「英雄…か」
　最後の弾倉に弾が行き渡ったのを見るとミツルはその弾倉を服に入れ込む。
「レムちゃん。俺は弟が誇らしいよ・・・君みたいな可愛い子がスバルを好きになって、色んな人を助けて…俺は最高の弟を持った。それに比べて俺は…ただその日暮らしの日常を送ってるだけ・・・こうやって宛もなくのらりくらりと殺していってる。度し難いもいい所だ」
　ミツルは改めてレムの方を向き口を開いた。
「レムちゃん。俺はな、自分の両親を殺したんだ」
「えっ…?」

レムは理解した。ミツルが自分の両親を殺したという事は、それはつまり・・・。
スバルの両親を殺したという事だ。
「2年前だ。俺たちはある生存者グループにいた。そこでは争いもなく、物資も豊富だった。朝起きれば忌まわしき腐った肉袋たちの声ではなく、子供たちの声が耳に入る。外に出ればそこには血みどろの戦いではなく、なんの意味もない日常の会話をしている隣人たちの声が耳に入る。奥様方は他愛もない井戸端会議が、男達からは仕事の愚痴やこれからの仕事内容。そんな地獄とは無縁と言える生活の中、俺は思い知った。善良な人間ほど先に死ぬ。
感染者の群れが街にやってきたんだ。俺達は何とか粘ったがそれも何分も持たなかった。俺たちの街はたった30分で壊滅した。生き残ったのは俺を含めたわずか3人の人間。だがその二人も噛まれてた。助け出せなかった・・・結局生き残ったのは俺だけ。その街には50人もの人間がいた。大人の男19人。女18人。老人子供12人。そして俺。5年経った今でも鮮明に思い出せる。」
「…酷いです…」
「ああ、酷すぎた。両親は感染者に噛まれてて奴らになっていた。そして俺は両親の成れの果てを殺した…」
そこまで話すとミツルの目から涙が流れていた。目頭を抑え、袖で涙を拭う。

「…人はどんな些細な事で死ぬ。豊かで幸福な時間はたった些細な３０分で崩壊するんだ。なぜ俺があの時一人だけ生き残ったのかなんて知らねえ。だが俺は戦うことを放棄する気はない」
「スバル君のお義兄様・・・」
「ミツルと呼んでくれ。レムちゃん」
「は、はい。ミツルさん」
　彼女のその回答を聞き、ミツルは銃の安全装置を付けて毛布を羽織るように自分の身体を包む。
「明日は早い。もう寝よう」
「はい。」
　レムも一礼するとその場から離れ、自分がさっきまで寝ていたソファに戻り、身体を倒した。対面隣で寝ているスバルのソファを見ると、そこには腕を口元に当て、涙を流しながら寝転がっているスバルの姿があった。

次の日、昨日まで曇っていた空が嘘のように晴れていた。快晴の空の中、ミツルたちは家から出て行く。

「殺す時は頭を狙うんだ。銃は音が出るから一体の時はナイフや音の出ない武器で倒せ」

だが、よく見るとスバルは丸腰であることを思い出す。ミツルはナイフと拳銃を出す。

「スバル、持っておけ。必要になる」

「でも俺使い方わかんねえよ」

それを聞くとミツルは拳銃のスライドボタンを押しマガジンを見せる。

「このボタンで弾倉を出す。銃身に弾を送るにはスライドを引くんだ。撃つときは安全装置を外せ。それ以外の時は安全装置を付けていろ」

そこまでの動作をするとスバルに拳銃を差し出す。スバルもオドオドしながらだが銃を手に取る。

ズッシリと重いその銃フレームは鏡のように磨かれているのか、スバルの目元が映る。

「レムちゃんにいつまでも守ってもらうつもりか？」

そこまで口にすると後ろからうめき声のようなものが聞こえた。二人が目にしたの

はミツルの後ろから忍び寄る感染者。スバルとレムが声を出そうと口を開く。だがその前にミツルは後ろを向き感染者の頭を掴み壁に顔を叩きつけた。ベキャシャ！と硬い物と柔らかい物を叩きつけたような音が響く。だがその一撃で倒れるハズも無く、感染者は痛覚も死んでいるのか、叩きつけられた痛みを感じさせないように首を動かそうとしている。

それを見てミツルは再び感染者の頭を何度も何度も顔を返り血で染めながら壁に叩きつけた。顔がグチャグチャになり、頭蓋骨が肉眼で確認できるぐらい陥没し、最後の一撃と言わんばかりに力いっぱい壁に叩きつけた。脳みそが陥没した骨により刺さったのか、壁にめり込んだまま動かなくなった。

「いつでもどこでも危険は付きものなんだ・・・自分の身は自分で守れ、そしてレムちゃんを守ってやれ」

銃の弾倉を手に取り、それを銃に入れる。カチッというまで弾倉を押し込みスライドを後に引っ張る。次弾が装填されスライドを元に戻す。

それは先ほどの衝撃的現場を見たからか、スバルの瞳に決意を感じさせる光が宿っていた。

「わかったよ兄貴。俺は何としてもレムを守る」

スバルの言葉にレムは顔を赤くしながら手に持っていた荷物で口元を隠しスバルを

見る。ミツルもそれを見ながら首を縦に振った。
「スバル・・・成長したな」
スバルの肩に手を置き、ミツルは優しく微笑む。それはまるで父親のような優しい眼差しで。
スバルの肩から手を離し、銃を手に取る。
「さて、もうここに長居は無用だ。スバルの話だとこの世界に来る前に何人か一緒に居たと聞いた。その人たちもこっちに来ている可能性がある。この近辺にいるか散策して調べるぞ。途中家の中を調べて物資を集める」
「わかった」
「はい」
銃の弾倉を取り、その中に銃弾が入っていることを確認すると再びその弾倉を銃に付けコッキングレバーを引っ張る。
「じゃあ、行くぞ」
ミツルは家の外に出て行くとその後を付いていくように二人は追いかける。スバルは右手に拳銃を左手にナイフを持ち、決意を新たにし、レムとともに荒廃した世界に足を踏み出した。
荒廃した世界に足を踏み出すと、そこにはいつもと変わりない太陽の眩しい日差しが

差し込んでいた。だが遠くからか、死者たちのうめき声のようなものが小さく聞こえた。

2話「戦闘開始」

ミツル、スバル、レムの3人は荒廃した東京を行く宛もなく歩き続けていた。今の目的はスバルの仲間たちを探しながら物資を集めていく事だった。既に荒らされたであろう二階建ての家に入り銃を構えながら入っていく。勿論中には死人が居る。3人（主にはミツルが）は死人を倒し武器になりそうなものや食料を確保する。

「拳銃が一丁に弾が5発分。後は散弾銃が一丁に弾が１０発分」

「食料はドッグフードと缶詰が3個」

「後は果物があったので取ってきました。それと飲み物です」

カシュッと先程拾った銃のマガジンを取り出し弾を抜く。弾の口径からスバルの銃に合うためスバルに渡す。食料と水はリュックに入れ込む。散弾銃は中折式散弾銃だったため、中に弾があるかどうか見てみる。弾は既に撃たれている。すぐに次弾を装填させる。

「兄貴、銃の扱いに慣れてるな」

「お前の影響で映画とかゲームとかしてたからな。実際に使ったら慣れてくるものさ」

カチッと銃身を元に戻して散弾銃を背負う。

「でも兄貴が持ってる銃って、違法じゃあ…」
ミツルが持っている銃はＡＫ―４７ロシアの特殊部隊スペツナズが使っていたアサルトライフルだ。その頑丈さから信頼性の高い武器となっていた銃だ。
「お前は知らんだろうが、この事件が起きてから自衛隊の動きが活発になったんだ。そこでアメリカ軍は物資支援として大量の銃や弾が送られた。今じゃその支援も無駄になった。お前の銃もアメリカが使ってる銃だ」
スバルの持っている銃はＭ９拳銃。アメリカ軍が正式に使っていた自動拳銃だ。
散弾銃の弾を入れると銃身を元に戻し、肩に下げる。
「それよりもスバル。俺はお前に言っておきたいことがある」
「な、なんだ？」
「お前は人を殺せるか？」

「……は？」

スバルはミツルが言っていることが理解出来ていなかった。
「お前は何か勘違いをしていると思うが、お前の持っているものは何だ？」

ミツルはスバルが持っている拳銃を指差す。
「…身を守る物だよ」
「そう、身を守る物だ。それと同時に、これは人を殺す道具だ」
身を守るということは襲ってくるものを殺すという事だ。スバルはあの感染者のことを動物だと思うようにしていた。人を襲う飢えた獣と、あの時と同じ、異世界の村で戦ったあの犬の魔獣と同じだと思うようにしていた。
「この世界はもう法も無ければ秩序も無い。敵は感染者だけじゃない。物資を奪いに来る荒くれ者もいればよそ者を受け入れるわけもないグループだって居る。そんな時に何よりも頼りになるのは銃だ。俺も既に何人も殺してる。だが俺は生きるために必要なことだと思っている。お前にその覚悟があるのか聞きたい」
「そ、それは…」
スバルはすぐに口にする事が出来ない。この世界に生きる人間は生きる事に必死の人間達ばかりのはずだ。生きるためにスバルはその手を血に染められるのか。それはすぐに口にすることは出来ない。
「…時間はないがゆっくりと考えろ。だが忘れるな。最後に引き金を引いたらそれは自分の意思であり、自分の殺意で相手を殺すんだ。お前がどれだけ頑張ろうがこの世界は平等なんて事にはならない。それだけは覚えておけ…」

今のスバルには兄の姿が大きく見えた。これまで何が彼を襲ったのか、それは昨日の夜に知った。だからか、レムも言葉を出せなかった。レムも理解するしかなかった。この世界のあり方を、今の現状を。

「兄貴…変わったな」

「5年もこの世界に生きてればそうなるさ」

「そうじゃないよ。兄貴は強いってことだ。もし俺がこの世界に居続ければ俺もそんな風に強くなれたか…」

「いや、俺は強くない。現実を受け入れて抗ってるだけだ。それにお前は俺より強い。なあ、レムちゃん」

「はい、スバル君は強いです。ですが、ミツルさんもそれぐらい強いです」

「えっ…」

レムの言葉にミツルは驚いてしまい、思わず後ろに半歩ほど下がってしまう。

「確かにミツルさんはスバル君と違い決断力や状況を見た上での判断力もあると思います。ですがお2人はどんな相手にも立ち向かう勇気がありますし、他人を想いやる優しさがあります。やはりお2人は兄弟なのですね」

スバルとミツルは互いに顔を見合い、ぷっと吹き出す。

「お前が敵にねえ、想像もつかねえな」

「俺は兄貴の弟だからな。やる時はやる男なのさ！」
　自分の胸に拳を当てエッヘンという効果音が似合いそうな姿を見せると、ミツルとレムは笑った。
「まあ、さっきの話は頭の片隅にでもいいから覚えておいてくれ。俺はお前らが生き残るように最善を尽くすつもりだ」
「レムもお手伝いします。スバル君も、ミツルさんも守れるくらい」
　3人は笑った。その笑顔は、崩壊した世界には似つかわしいくらいの幸せに満ちた笑顔だった。
　が、その笑顔もすぐに消える。

パンパンパン!!

「「!?」」
　火薬が弾けるような音が小さくだが聞こえる。3人のうちスバルとレムは何が起きているのかという驚きの表情に、ミツルは真剣な眼差しで外を見る。ミツルは走り出

し、家の２階に上がりベランダに出て外を見る。
「あれは」
すぐそこにある橋のとこに人がいた。見てみると３人ほど居る。そしてそこには感染者姿も確認出来た。ざっと肉眼で見える限り１０体以上居る。１人は応戦しているが、もう２人は何かを焦っているように足元を見ていた。
「ちっ、厄介事が次からと…」
ミツルは銃のコッキングレバーを引っ張り、走り出した。

「畜生！何処から湧いてきてきやがった！」
１人の金髪の青年は手に持っている銃を感染者に向かって撃ち込む。パァン！と銃声が響き、薬莢が足元に落ちる。
一方、戦っている金髪の青年の後ろには２人の青年がいた。だが、そのうち１人は足にトラバサミのようなものが足を挟みこんでいた。もう１人の坊主頭の青年は手に斧を持っており、そのトラバサミを何とかしようとするもビクともしないでいた。
「助けてくれ！頼む！」

わかったから大声を出すな！助けてやる！」
トラバサミの口に指を入れ込み力いっぱい開こうとする。
「あああああああ!!」
だが、どこか足の肉が挟まっているのか、トラバサミはビクともしない。変わりに男の悲鳴が響き、鮮血が道路を赤く染めていった。
「畜生！どうすればいいんだ！この罠返しが付いてるぞ!?」
「もう弾が持たねえ！」
金髪の青年が銃のマガジンを交換しようとした瞬間、横から感染者が現れ青年の肩を掴む。
「うわっ!?」
青年は突然現れた感染者に驚き尻餅をつくとそのまま捕まれ押し倒される。感染者は目の前の獲物に唸り声を上げながら歯を見せて噛み付こうとする。
「正博！」
坊主頭の青年が叫ぶ。
ダン！
一発の銃声が響く。ガクンとこめかみから血を流し倒れる感染者。
だが撃ったのは金髪の青年では無かった。ムクっと上半身を起こし金髪の青年は坊

主頭の青年を見る。だが彼は首を横に振った。今の銃声は彼のものではない。だとしたら？

「下がれ！」

銃を構えて坊主頭の青年に声掛けるミツル。そのあとに続きスバルとレムもやって来た。

有無を言わさず銃の引き金を引くミツル。近くの敵の頭に向かって、撃つ、撃つ、撃つ。だが数が多い。銃声により集まったのか、既に周りには４０体近くの感染者の姿だ確認できる。しかもその後からほかの感染者がこちらに近づいている。

「弾がどんだけあっても足りねえな…スバル！怪我人の様子はどうだ！」

「何だこのトラバサミ！ダメだ！返しみたいな刃が足の肉に引っかかってる！」

「何とか取り外せ！もう猶予はないぞ！」

銃を再び構え、サイトを見て照準を合わせる。

「やあああああ！」

ベゴシャッ！

上空からモーニングスターが感染者に向かって降り注ぐ。上を見るとレムが上空にいた。おそらく車を踏み台にしたのだろう。

モーニングスターに当たった感染者はその腐った身体が粉々に砕け散り、真っ赤な血

溜まりと肉片だけが残った。
「…今なら前言撤回してもいいかな？」
「そんなこと言ってる場合じゃないだろ兄貴!!」
「それもそうか」
アサルトライフルを後に回し、腰につけているマチェットを抜くミツル。
地面に着地したレムだが、自分の影が映っている地面にレムの影を消すように大きな影が重なる。後ろを向くとそこには大男の感染者が居る。
「しまっーーーーー」
ザシュッ！
感染者の顔は横に真っ二つに切られる。切り落とされた顔半分はベチャッと地面に落ち、大きな体も倒れると、そこには血の付いたマチェットを持ったミツルがいた。
「油断大敵だ。レムちゃん」
「…心配には及びません。だって、レムの背中はミツルさんが守ってくれます！」
２人は背中合わせに周りの感染者を見る。
「嬉しいねぇ…こうして生死をかけて戦っているのにワクワクしやがる。俺も若い証拠かな？」
「レムもです。ミツルさんやスバル君がいれば、負ける気がしません！」

「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ、その意気だ…スバル！こっちは何とかして時間を稼ぐ。お前は怪我人を何とかしろ！」
「わ、わかった！」
だが如何せん敵の数が多すぎる。多勢に無勢な状態には変わりない。
ここでミツルたちが取る行動は逃げることだ。だが直ぐに逃げさせる状態でもないの事実だ。だからこそミツルとレムは前に出た。感染者の注意を引くべく。
「いいかレムちゃん。全部殺そうと思うな。時間を多く稼ぎ何としても全員で生き残るぞ」
「はいっ！」
レムの返事を聞き、ミツルはマチェットを２回ほどクルクル回し、構え直す。
「さあ、戦闘開始だ」
感染者の群れに向かって２人は同時に前に出た。

3話「人間として」

感染者の大軍に立ち向かうミツルとレム。感染者の頭を切り落とし、潰し、辺りが血みどろの戦場の中でスバルは怪我をした青年の元で足にかかっているトラバサミのようなトラップを何とか外そうとする。

「このっ…！」

布を使い素手で歯を抜こうとするも、トラバサミについているギザギザの返しのような刃が青年の足を離さない。布は赤い鮮血に染まりきり、地面にも血がドバドバと出ていく。このままでは青年は大量出血により命を失われる。

「ダメだ、力いっぱい込めれば動くけど刃が抜けねえ！」

「何とか出来ねえのかよ！」

怪我をした青年は既に顔色が悪くなり、痛みのあまり痛覚が無くなってきたのか、虚ろな目をして小さな声だけが発せられる。

足を切り落とすという手もあるがそれをすれば出血は酷くなり出血死は免れない。このトラップを付けたまま動かそうにもトラバサミは重く、ビクともしない。

「クソっ！」

血塗れの手を地面に叩きつけ嘆く。すると虚ろな目で青年は口を開いた。
「もう…いい…」
「「えっ…？」」
「自分の…ことは…自分がよく…わかってる…」
か細い声がスバルの耳に入る。
「お願いだ…殺してくれ…」
この場で1番聞きたくない言葉が発せられる。

「ちっ、キリがねえ！」
マチェットの付いた血を振り落としながらミツルは周りを見る。感染者の数は減っているというよりむしろ増えている。怪我した男の血の匂いにつられているのかはわからないが確実に増えていた。
ふと目の前を見ると腹に鉄パイプが刺さった感染者がこちらに向かってくる。
「うおっ！」
咄嗟にその腹に突き刺さった鉄パイプを抜き取り、感染者の頭に突き刺した。パイプの穴から黒ずんだ血が流れ出ていき足元を血に染める。

ズボッと鉄パイプを抜き、レムの居る方向を向く。後ろから近づく感染者がゆっくりとレムに近づく。
「おうらぁ!!」
鉄パイプをまるで槍投げのように投げ放つと鉄パイプは一直線に感染者の頭を捉える。
「ありがとうございます!」
「ああ、だが俺たちの体力がまず持たねえ。このままじゃあジリ貧だ」
ホルスターから拳銃を取り出して安全装置を解除する。弾ももう持たない。マガジンを数えるともう4本分しかなかった。
「レムちゃん、感染者の数が尋常じゃない!後退するぞ!」
「ですが、怪我したお人はどうするのですか!?」
「…然るべき処置をする」
ミツルは拳銃を構えて、感染者に照準を付け、引き金を引いた。

「そんな…」

怪我をした男は首筋の服に手を取り、捲ると、そこには大きな噛み傷があった。首筋から血が滴り、黒い服に落ちる。

「俺は…もうすぐ奴らと同じになる…だから、せめて人間のうちに…殺してくれ…」

か細く、聞きたくない言葉がスバルの耳に入る。聞きたくない。そう思ってるのにも関わらず不思議と手に耳を当てない。この男の最後の遺言として想っているのか、それとも…。

スバルは腰に差した拳銃を手に取ると、今日ミツルに言われた言葉を思い出す。

『お前は人を殺すことが出来るか?』

その言葉の意味を深く考える余裕はなかった。だが、銃を手にした時からそれは考えることだったいや、深く考えようとしなかったのだ。

所詮銃は人を殺す道具。このような場面に出会すことは予想出来たはずだ。それなのに考えなかった。それはスバルの手がまだ綺麗なのか、それともまだそのような考えを持てなかったのかだ。

「畜生!まだか!?」

近くまで聞こえるミツルの声と銃声。既に奴らがそこまで来ていた。何とかレムも戦っているがそれも時間の問題だ。決断の時は来た。ここで躊躇えば犠牲者が増えるかもしれない。

スバルは手に持っている拳銃を怪我した男の頭に照準を合わせる。
「おいお前何やってんだ！」
「勝也！」
金髪の青年が坊主頭の青年を抑える。この金髪の青年も分かっているのだ。噛まれた人間は助けることが出来ない。ただ奴らになるしか無い。だからこの青年は人間である今のうちに殺して欲しいと願った。死ぬならせめて人間として。
「スバル！決断するんだ！生き残る為に決断するんだァ！」
引き金に指をかざすが、カタカタと銃身が揺れてしまい照準がぶれる。
「ハァ！ハァ！ハァ！」
目から自然と流れる涙に乱れる呼吸。これまでとは違う。死にゆく人を見送るのでは無く、自分の手で殺す。死に戻りで何度もあった。自分の想い人の死を見送り、大切な人を見送り、友人を見送り、戦士達を見送ってきた。だが今回は違う、今回は自分の手で殺すのだ。
「レムちゃん！時間稼ぎを頼むぞ!!」
「ハイ！ミツルさん！」
ミツルはマチェットを鞘に収め片手をスバルの手に添える。ブレを押さえ、震える手を支える。

「・・・あ、兄貴・・・！」
「しっかりしろスバル…力を抜いて狙いを付けろ。俺が照準を付ける。そのまま引き金を引くんだ。良く狙え、お前は1人の男を殺すんだ」
その言葉を聞きスバルの指に自然に力が入り引き金を引き銃口から弾丸が発射された。
弾丸は真っ直ぐ飛んでいき、名前も知らない青年の頭を貫き、バタリと倒れた。
「走れええええ!!離脱するぞぉぉぉ!!」
肩に背負った散弾銃を手にし2発分の発砲音を合図に全員がその場から走り出した。

「「はぁ・・・はぁ・・・」」
必死に走り抜けて人気も無い所まで逃げてきた5人は生き残った。安堵の出来る時間を手に入れ、ミツルは煙草を口に咥えて火を付けた。
「なんとか・・・生き残ったな・・・全員」
「ぜん・・・・いん・・・？」

坊主頭の青年はズカズカと歩きミツルの胸ぐらを掴みだす。それに反応してレムは身構えるが、ミツルがレムに手を向け待てと合図を送る。
「・・・貴様!」
「・・・言いたいことがあるならはっきり言え・・・」
「兄貴、違う!俺がやったんだ!兄貴は関係無い!!」
「スバル、何がどう転ぼうが俺も荷担したんだ。俺も同罪だ」
「お前が・・・!お前が・・・!!」
「俺達があの青年を殺したってか?違うな。俺達が殺したんじゃねえ。世界が殺したんだ。彼は首筋を噛まれてたんだろ。俺達にはこの状態を打破出来ることはない。喰うか喰われるかのどちらかしかねえ。その中で彼は願った。『人間らしく死にたい』と」
「だけど・・・!少しぐらい慈悲の心があっても・・・!」
「いい加減にしろ・・・」
　口から白い煙を坊主頭の青年に吹きかける。
「げほっ!ごほっ!」
　煙によりむせ返し青年は手を離す。その隙を狙い。ミツルは坊主頭の青年の胸ぐらを掴み、壁に叩きつけ拳銃を手にし、青年の頭に銃口を突き付ける。無表情の冷静な瞳の中に明確な殺意を孕んだ目が彼を睨みつける。

「兄貴!?」
「ミツルさん!?」
　スバルとレムが反応して動こうとしたが、その行動はすぐに静止されてしまう。ミツルの瞳が2人を見ていた。睨んだものを凍らせるようなその殺気に満ちたその瞳で2人は動けなくなった。こんな目をする人間がいたのか、それはこの世界で5年間も生きてきたからなのか、考え出すといくらでも思い浮かぶものは出てくる。だが決定的なものがそこにあった。2人はミツルに少なからず恐怖している。
　ミツルは睨んだつもりはないのだろうが、2人が動かないのを確認すると視線を掴んでいる青年に戻す。
「現実を見ろ。この世界の何処に慈悲何て言葉が出てくる?むしろ俺達は彼に慈悲の心を与えたよ。考えても見ろ、彼は噛まれていた。あのまま逃げ出すことも出来たが、それだと奴らに喰われていたし、喰われなかったとしても奴らに転生して君らに襲いかかるかもしれなかった…寧ろ尊敬の気持ちの中で彼を殺せてよかったと思ってる。」
「…き、さま!」
「ここまで話してもまだ分からねえか、救いようのねえ馬鹿野郎だ。じゃあ言い方を変えよう。君は彼を殺すことが出来たか?感染者となった彼を、化け物に成り果てた彼を殺せたか?」

「…！」

青年はようやくその言葉の意味を理解した。彼が何故殺してくれと言ったのか、それは自分が感染者になり仲間を襲いたくないから出た言葉だからだ。

「俺は君の様に強い正義感なぞ持っていない。敢えて言えば俺は大量殺人鬼だ。生きていく為に殺し尽くした。だがそれは今までの仲間の意思を持っているからだ。銃(これ)を持った瞬間、死んでいった奴らの分まで生き続けなければならないんだ。ここで楽な方(死ぬ事)を選ぶのは君の勝手だ俺はそれに咎めねえし否定しねえよ。俺は君を罰する権利もないのも事実だ。腐った死体共に喰われるなり自害なりなんなりしろ、一瞬の苦痛で逃げられる。だから死ね・・・そうやって楽な方を選び友の死を無駄死ににさせろ!!」

掴んだ手を荒々しく離し、後ろを向き手に持っている銃をホルスターにしまった。青年は涙を流しズルズルゆっくりと壁に背中を擦り付けながら地面に腰を下ろし流れ続ける涙が地面に落ちた。

「ちっ、生きるっていうのは死ぬより辛えんだよ・・・馬鹿野郎」

口にくわえているタバコを指で挟み、口から離して白い煙を吐いた。紫煙はゆっくりと空に登っていった。

安全を確保した5人は取り敢えずと言う様に休憩をしていた。レムも先程の戦いで体力を消耗していた。隣ではスバルが心配そうにレムの看病をしている。
「大丈夫か、二人とも」
「は、はい・・・大丈夫です」
「俺も大丈夫だよ…」
ミツルはリュックから水の入ったペットボトルを二人に渡し、ミツルも自分の分の水を取り出す。
「スバル・・・殺しは初めて、だよな?」
「・・・・・・」
スバルは黙ったまま俯いている。ただじっと手に持っているペットボトルを見つめていた。
「別に咎めてるわけじゃない。あの状況じゃああするしかなかったんだ。むしろ良くやったと褒めるところさ」
「兄貴・・・」
「俺も数えきれない程殺してきた。感染者も、人間も、敵対してきた奴らを全員殺して生きてきた。だが俺は後悔をすることはしなかった。それをする時間があるなら俺は生

きる意味を探したかった。じゃなきゃ罪悪感で押しつぶされそうだった・・・」
「・・・」
「まあ、猶予をやったのにすぐに迫った俺も殺しに荷担したも同然だ。お前が気に病むことじゃない。どうしようもなかったんだ・・噛まれた人間は、どうしようもない。どんな名医にも治せない。治療法は・・・殺す事しかない。だからスバル、一度銃を手にしたら地獄行きだ。だからこそ、地獄に落ちるなら、守るもんの為に一緒に地獄に落ちようじゃねえか」
「・・・わかったよ兄貴、俺は守るもののために銃を握る。今度は覚悟を決めた」
　水を飲み終えたスバルはペットボトルをミツルに投げるとミツルはそれをキャッチしリュックにペットボトルを入れ、散弾銃の撃ち終わった薬莢を取り出し新しい弾を入れた。
「あ、あの・・・」
　後ろから声を掛けられる。その声を掛けた人物の方を見ると先ほど助けた二人組の青年のウチの坊主頭の青年だった。
「さっきは、すまなかった・・・俺、自分の感情ばかりに怒鳴っちまって・・・そこの君も、ありがとうな・・・アイツを・・・弟を人間のまま死なせてくれて」
「ッ・・・!弟・・・!?」

ミツルは黙ったままリュックからある物を手に取り立ち上がると手に持っている物を青年に差出す。それはエネルギーバー二本だった。
「・・・食べておけ。弟さんの分もしっかり生きていくために・・・向こうの彼にもやってくれ」
「は、はい・・・!!」
５人はその日の激闘の疲れを癒やすために近くの民家を使い一夜を明かした。

「そうか、勝也も正博も別々の行動をするのか」
「ああ、満には悪いけど、俺達にはやることがあるから」
「そうか・・・じゃあ、お互い生き残ろうじゃねえか」
「そちらも気を付けてくれ。特にこれから向かう所は荒くれもの達が多い所だから」
「大丈夫さ、こっちには自慢の弟とその弟の嫁候補がいるんだから」
「あ、兄貴!?」

「お、お義兄様・・・人前でそんなことを大声で・・・」
「レムも乗らなくて良いから！」
　とレムは口で言っているが顔を赤らめながらにやけた顔をしている。
「冗談はさておき・・・行くしかねえよ。レムちゃんのお姉さんやスバルが世話になってた人がいるかもしれねえからな。世話になったのをあだで返すような事はしたくねえし、なによりレムちゃんの家族はスバルの家族も同じ、スバルの家族は俺の家族だ。家族が家族を見捨てるわけにはいかねえだろ」
　煙草の紫煙を口から出しながらミツルはニカッと笑う。
「ふふ、なんだか君ならどんな困難でも乗り越えられそうだな。まあ、達者でな」
「お前らもな」
　途中で調達した車にそれぞれ乗り出す5人は車のハンドルをてに取り、それぞれの道に進むためにペダルを踏み、走り出す。
「さあ、出発だ！」
「はい！」
「エミリアやラムを探しに行くぞ!!」
　三人は進み出した。新たな目標に向かって。

「スバル君、この乗り物はなんでしょうか、独りでに進んでいて凄いですね」
「これは車っていって、人力車と違ってペダルを踏むと走るんだ」
「ほとんどスクラップ状態だったが、何とかバッテリーも大丈夫だったから動かしたんだ。ホント便利だよな車って」
「そう言えば兄貴って運転免許持ってたんだ。いつ取ったんだ？」
「あ？取る暇があったと思うか？俺とお前の年齢は？」
「えっ？同い年だったよ・・・先に生まれたのは兄貴だけど・・・」
「そう、でこの世界でお前が居なくなったのは？」
「・・・5年前？」
「で、この世界が地獄になったのは？」
「確か、スバル君が居なくなってすぐですね」
「・・・まさか兄貴？」
「奴らをひき殺すのに免許なんていらねえだろ？」
　ミツルはシフトレバーを手に取り、ギアを変えてさらにスピードを出す。
「いやそうだけどスピードを緩めてくれぇぇーー!!」
「心配すんな！ちゃんと安全運転するから！」

再びシフトレバーを握りギアを変えスピードを出す。
「す、スバル君!」
スピードを上げ、ミツルはハンドルを大きく左右に曲げて障害物を避けていく。後ろにいる2人は何とか体をお互い支え合う形を取る。
「だがちゃんとシートベルトは付けろよ? 揺れるぜぇぇ!!」
「ならスピードを緩めろぉぉぉ!!!」

4話「シビレさせたのは誰?」

高速道路は乗り捨てられた車やスクラップ状態になった車が所狭しと置いていた。
ミツル達3人は元はパーキングエリアだった場所に車を止めて窓にサンシェードやカーテンをつけて奴らの視界に入らないようにして休んでいた。
目的地は『渋谷』

前日
『姉様が!?』
蝋燭の火を頼りに5人は夜を明かすために民家で休んでいた時、お互いの情報交換をしていた。その中でミツル達は有益な情報に食いついた。レムの姉であるラムらしき人物の目撃情報だった。勝也達がここに来る途中、渋谷にレムと同じ服装で桃色の髪の毛の女の子を見たと。
『その情報はマジなのか?』
『俺達も驚いたさ。君を見た瞬間渋谷で見たことある女の子がいるって』

『でも髪の色とかも違うからすぐ気づけたんだ』
『…もしかして、レムちゃんとレムちゃんのお姉さんは双子?』
『はい、レムとラム姉様は双子です』
『(双子だけど見たらすぐわかる…髪の色が違うけどそれだけで判別するにもなぁ…双子ということはレムちゃんと同じでメイド服…その他にも違う部分がある…身長?髪型?ん?)』
　ふとミツルはレムの姿を改めて見る。そしてその中でミツルはレムのふくよかな胸を凝視してしまうがすぐに視線を焚き火に戻した。
『(…古今東西姉とは妹より勝っているという諸説がいくつもある…まさかだが…いかんいかん!)』
　ガンガンガン!!
　頭をメンテナンスをしている拳銃のグリップで殴る。他の4人はミツルの行動に理解出来ず狼狽える。
『兄貴何やってんだ!?』
『いや別になんでもねえよ』
　顔を上げて見るとミツルの頭から血が流れていた。ついでに鼻からも。
『とにかく目的地は決まった。渋谷だ』

『姉様…!』
『ラムを探すぞ!』
『だったら気をつけた方がいいよ。あそこは荒くれ者の巣窟みたいなところだから』
『武器が心元ねえな。渋谷は当初感染騒ぎが起こったところだ。騒ぎで警察や自衛隊が総動員したとこだし、武器だって俺たちのよりゴツイ物を持ってたはずだ』
『それならこれを』
正博は荷物をゴソゴソと漁るとカバンからあるものを出した。それは銃だった。大きさは拳銃より大きく、ミツルの持っている銃より小さい。
『…マシンピストルか』
ミツルはその銃を手に取り弾倉と銃身に入ってる弾を抜き銃の状態を確認する。アームサイト、引き金、スライドを確認し、引き金を引いてみる。カチッという音を立て、状態を確認し終わると弾倉を再装填させる。
『今回助けてくれたお礼だと思ってくれ。流石に今の武器じゃ心許ないだろうし、俺は連射より単発の方がしょうに合ってるし』
『すまんな、お前らも物資不足なのに』
『いいさ。困った時はお互い様さ』

そして今に至る。朝になるとミツルは寝ている他の2人を起こさないように外に出てパーキングエリアの建物の中に入り食料がないか探してみる。乱暴にドアを足で開け、銃身を短くした散弾銃を片手にし気だるそうに銃身を肩に置いている。

食堂のキッチンに赴き缶詰をかき集める。中に入りスパゲティに使うトマトソースなどもあるがそんなの関係なくカバンの中に入り詰めていく。

「おっ、グリーンピースの缶詰か、ビタミン剤もあるじゃねえか。こんなもんここでどう調理に使う気だったんだか…」

誰に対してではない独り言を言いながらミツルはカバンを背負いキッチンを後にした。

他に日用品がないか調べてみるとミツルはタバコのカートンを山のようにあるダンボールの中に手をツッコミできるだけ多くのタバコを入れていきCDが売られている売り場が目に映った。1枚のCDケースを手に取るとそれはドライブに最適テンションアップの洋曲集と言うタイトルで書いている。それを片手に、ミツルは店から出ていき、スバルたちの元に戻っていった。

「Hey、お二人さん起きろ。朝飯調達してきたぞ」

車のドアを開けて中に入ると2人に声かける。助手席で寝ているスバルと後部座席

で寝ていたレムはその声ですぐに目を開ける。やはり旅の疲れが出てきているのか、２人は起きるや否や同じように欠伸をして無理やり頭を覚醒させる。

「また大きなあくびなこって…ほらよスバル、レムちゃん」

カバンから取り出した水と缶詰を二人分渡し、自分の分の缶詰と水を出す。

「ありがとう兄貴」

「ありがとうございます。ミツルさん」

カパッと缶詰の蓋を開けて中身を先割れスプーンに乗せて食べる。中に入っていたのはトマトソースで煮込んだマカロニパスタが入っていた。

「あ、そうだ…」

缶詰をダッシュボードの上に置き先程のＣＤを出した。封を開けてパッケージから１枚のＣＤを取り出し、車のキーをＡＣＣをＯＮにさせてオーディオプレイヤーに入れ込み小さな音で再生させた。

『♪Ｉ’ｄ ｌｉｋｅ ｔｏ ｔｈａｎｋ ｔｈｅ ｇｕｙ
Ｗｈｏ ｗｒｏｔｅ ｔｈｅ ｓｏｎｇ
Ｔｈａｔ ｍａｄｅ ｍｙ ｂａｂｙ
Ｆａｌｌ ｉｎ ｌｏｖｅ ｗｉｔｈ ｍｅ♪』

懐かしいジャズ調でゆったりとした音楽がスピーカーから小さな音で流れ出す。

ちゃんと音が出ていることに満足してミツルは再び缶詰を手に取り食事を開始する。
「兄貴この歌古いぞ」
「いいじゃねえか古い歌好きなんだよ。コーヒー飲みたいな」
　こんな世界になって気楽に出来る娯楽といえば酒やタバコくらいなものだ。ここ数年間1人だったミツルからしたらサウンドを聴く自体が久しぶりなのだ。
「不思議な曲ですね。これもスバル君たちの世界の音楽なのですか?」
　異世界から来たレムからしたらこれも不思議なものなのだろう。楽器も何も無いのに音が聞こえるという現状にレムは関心を持っているらしく、ミツルやスバルに問いかける。
「まあ、俺たちの国の歌では無いんだがな」
「まあそれでもいい歌には違いない」
　トマトソースを口に入れて飲み込む。
「やっぱコーヒー飲みてえわ」

　食事を終わらせると3人は再び車で移動を再開した。周りは変わらない光景ばかりが広がっていた。動かない鉄の大きな塊と動く死体が何人かいるがそれを無視して先

に進む。
　運転しているミツルに対してスバルは双眼鏡で辺りの警戒をするが、ふとミツルの持っている散弾銃を見る。銃身が切り詰められており、取り回しがしやすくされているのに気がついた。
「その銃そんなに短かったか？」
「さっき休んだパーキングエリアのガススタに色々工具があってな。銃身を切り詰めてソードオフショットガンにしたんだ。狭い室内戦なら取り回しも効くし至近距離なら殺傷威力も上がる。特にこれから行く所はそうなりそうだしな」
　今からミツル達が行く所は渋谷。そこはまさにならず者の巣窟と言っても過言ではない程の場所だった。ミツルも何度か立ち寄ることがあったが、そこはとても人が住めるような場所ではないという話だ。その理由はかつて人が多くいたこともあり感染の拡大も早く大きかった。だがある一部の人間はこの広大なコンクリートジャングルを生き残り、組織と言ってもいいような勢力をつけていった。
「どっちにしろ戦闘は避けられないという事ですね」
「ああ…っと！」
　アクセルから足を離し、ブレーキを思いっきり踏みつけスピードを落とす。
「おわっ」

「きゃっ」

揺れによりレムは咄嗟に隣のスバルの腕を掴むとスバルもレムの肩を持つ。

「ここもか…」

車のキーを回しエンジンを切るとミツルはドアを開け外に出る。

スバルもレムを気遣いながら前を見るとあるものが目に入る。ミツルは「おいおい・・・」と口にしながらタバコを咥える。

そこにあったのは人の首だった。鉄パイプのような物を地面に突き刺し、それに何人かの人の首だけがロープで固定されくくりつけていた。そのまま首をもぎ取ってくくりつけているからだろう、その首は獲物を求め動いていた。

「悪趣味だ・・・ということは、ここが渋谷…」

実を言うとミツルたちが出発した所は車で高速であれば３０分もあれば行ける場所だった。だが渋谷に行く道中には車が渋滞して捨てられていたりしていたため、大回りやなんやかんやしながらここまで来た。車を捨てて行くのも手だが、ある程度物資を集めたミツルたちは荷物や移動効率を考えてあえて大回りしながらやっとこの道を見つけ出した。

まるで警告をするようにあるその首をミツルはマチェットで切り離し、とどめを刺した。首の始末を済ませるとミツルはすぐに車に戻るとすぐに銃の弾倉を確認する。

拳銃、ソードオフショットガン、ＡＫ、さらに正博から貰ったＵＺＩマシンピストルの弾倉も確認をする。
「レムちゃん俺が合図したらかがめ。スバル、お前運転してくれねえか？ゲームセンターとかでレースゲームやってたからミッションの運転の仕方分かるだろ？」
「いいけど、何でだ？」
「何が起こるか分からねえからだよ。それと、ここからは下道を使おう。もうここからは敵地のど真ん中だ」
カシュッとソードオフショットガンの銃身に弾が入っている事を確認し元に戻し、助手席に座るミツルに対し運転席にはスバルが座る。
運転席に座ったスバルが車の鍵を回そうとした瞬間、パリィ!!という音と共にミツル側のドアミラーが砕け散った。
「な、なんだ!?」
「スバル君、後ろからなにか来てます！」
「早速おいでなすった！レムちゃん隠れてろ！スバル全速力だ！何としても撒くぞ！」
「わかった！兄貴、後ろ頼んだ！」
「ＯＫ、ＬＥＴＳ　ＲＯＣＫ!!」
割れたドアミラーを肘で破れず残った部分を砕き、そこから身を乗り出し後に銃を構

える。
後ろには3台くらいの車と2台のバイクがこちらに向かって走ってきている。
「死にたくなければどきやがれー!」
今、開戦の火蓋切って落とされた。

カセットテープ『チェ・ゲバラ』
【再生ボタン】カチッ
『なあ、兄貴』
『なんだ?』
『あの言葉の意味はなんなんだ?』
『よく狙え、お前は一人の男を殺すんだ』
『レムも気になってました。とても強く、印象に残る言葉でした』

『まあ、少し話が長くなるがいいか…これはチェ・ゲバラの言葉だ』
『チェ・ゲバラ?』
『俺らが生まれるもっと前にいた偉大な英雄だ。当時１９５５年のキューバ革命に参加した革命家だ。彼はキューバ革命参加を心に決めると娘も妻も置いて単身でキューバに渡った。彼はキューバ革命で多くの功績を残し、瞬く間に反政府軍トップ２に上り詰め、反政府軍を支援する地元民間人の加勢もあったため彼は激戦の末に１９５９年１月１日に敵大将が他国に亡命、キューバ革命を成した。彼は後のボリビア革命にも参戦し、そこで命を落とした。ボリビアで捕らわれたゲバラが殺される直前に言ったその時の言葉が「よく狙え、お前は一人の男を殺すんだ」って言葉だった。彼の死体は殺した証拠として両手首を切られた状態で埋められてたらしい。彼を知る人間を後にこう語った。『２０世紀最も優れた男』と」
『最も優れた男…』
『それだけ彼が優秀だったという事でしょうか?』
『彼は民衆の為に戦い、民衆のために死んだ。キューバの大臣になっても彼は休日返上で土木工事や農作業に出かけた。だがその潔癖さが彼を追い込んだ。ボリビア革命に参戦して彼はキューバ革命の思想が通じると思っていた。だが人材も民衆の支持も得られず、彼は死んでしまった。だが彼は少なくとも道徳的な人間だった。民衆から略奪

をしない事により、彼はキューバの民衆の信頼を得た。彼のような偉大な男こそが英雄と呼ばれるのだろう。ゲバラのような男は何処にもいないだろう。だが勘違いしてはいけない。俺たちは英雄じゃない。これからする事で英雄になる事は決してないだろう。俺たちは、一人の人間だ。この世界は英雄を欲してないんだから』

『でもレムは思いました。まるでミツルさんの様だなと』

『なに?』

『ミツルさんは見ず知らずの人を助けました。何の見返りも求めず、自分にリスクが伴っても危険を顧みずミツルさんはあの御二方を助けました。話でしか聞いてないですがミツルさんとゲバラさんは似ている気がします』

『俺がチェに?』

『そしてそれはスバル君もです。前にも言った気がしますが、やはりお2人は兄弟なのですね』

『何だかレムに言われると恥ずかしいな…だけど、俺もレムと同感だ。俺はゲバラのように誇れるか自信は無いけど兄貴は自分を誇ってもいい気がするぜ。確かに俺や兄貴はゲバラのような大きな思想も執念も無い。でも思ってることは同じだと考えてるよ。全員を救い出すのは確かに無理だ。でも目の前の救える命を見捨てることは出来ない』

『…ふっ…さて、歴史の授業は終わりだ。明日に備えて寝るぞ』

『はい』
『おう』
『俺がチェにね…いつか俺も同じ運命を辿る事になるのかね…よく狙え、お前は一人の男を殺すのだ…』
【停止ボタン】カチッ

5話「開戦」

「死にたくなければどきやがれーーー!!!」
怒号と共に銃声が鳴り響く。ミツルは銃を乱射し後ろにいる車を牽制する。後ろにいる敵の車を狙うが上手く窓を割ることが出来ない。
相手も負けじと銃を撃ち返してくるが、スバルがミツルを狙うことを予測してハンドルを切る。
「ナイスだスバル！」
「そんなことよりあいつら何なんだ！」
「さあな、相当俺らは奴らのテリトリーに入り込んじまったって事だろ！」
弾倉を変えてスライドを引きコッキングする。それと同時に敵車両の後ろから車とは違うエンジン音が響く。そのエンジン音は車と違いだんだん近づいている。
「ちくしょう、バイクかよ！」
「機動力で負けるのが目に見える。スバル！奴らは必ず前に来ようとするはずだ。その前に潰す。撃ち漏らしたら撃て！」
スバルは腰に指している拳銃を手に取る。殺すのは御免だが、殺されるのはもっと嫌

だ。だったら殺される前に殺すのだ。

「敵が左右に別れました！」

レムの声にいち早くミツルが反応する。

「いくぞ！」

再び窓から身体を出し銃をバイク乗りに向かって撃つ。バイク乗りは左右にジグザグに動きながらミツルの照準から外れながら片手に銃をつかむ。銃は片手でも乱射させることが出来るスコーピオンサブマシンガン。男が左手に銃を持った瞬間、ミツルの銃の弾が切れてしまう。

「チィ！」

最悪なタイミングに弾切れを起こしてしまう。拳銃を構えるにもバイク乗りの男が早く銃を撃つ。スコーピオンの照準がミツルを捉えた。

「アル・ヒューマ！」

だがバイク乗りの男が銃を撃つことは無かった。男のバイクはレムが放った氷の塊

により粉々に破壊されたのだ。エンジンやマフラー、ハンドルなどのパーツを地面にぶちまけると男の身体は地面をゴロゴロと転がっていく。だが彼の運命はそこで終わりを迎える。

後ろにいる車だ。車のタイヤは彼の頭を捉えそのまま前へと前進。タイヤの下敷きになった男の頭は車の重量とタイヤとの摩擦により被っていたヘルメットを粉砕し、赤い鮮血をバラまいた。

「…お気の毒だ」

敵とはいえとんでもない最後を一部始終目撃してしまったミツルは少ない同情を敵に送った。だがそんな中でも戦いはまだ続く。

ミツルが席に戻り銃の弾倉を変えようとしていた瞬間、もう一台のバイクがいつの間にか前に来ていた。もう1人のバイク乗りは左手に銃を持ち、フロントにいるスバルに照準を付ける。

「伏せろ!」

ミツルがスバルの頭を手で掴みしたに頭を下に押さえつける。

パラララ!!

軽い火薬の弾ける音と共にフロントガラスとリアガラスが割れる音が響く。全弾を撃ち尽くした男はバイクのスピードを上げて逃げる。

「大丈夫か!?」
「ああ、なんとか」
「レムちゃんは!?」
「はい、こちらも大丈夫です！」
２人の安全を確認するとミツルとスバルは拳銃を手に取って前のバイク乗りに照準を合わせる。
「墜ちろ！」
パパンパパン！
と２丁の拳銃がほぼ同時に銃声を出す。
「ッ！」
スバルも銃の振動に耐えながら銃を乱射する。腕の筋肉が銃の反動により悲鳴をあげる。だが殺られる前に殺ると決めたのだ。こんな所でやめるわけには行かない。生き残る為にスバルは引き金を引いた。
キュルルルルル!!
左右に蛇行しながら銃弾を避けながら射程距離から遠のくバイク乗りに対し２人が拳銃の弾を全弾撃ち抜く頃にはバイクの姿は小さくなっていき、高速道路を出る下道を使い戦線を離脱した。

「ちっ、逃がしちまったか！スバル、前にあいつが戻ってきたら迷わず撃て、俺は後ろの奴らに集中する！」

助手席に座っていたミツルは後部座席に移動すると窓から身体を出し再び後ろの車両に向かって即座に銃を構え再び銃を乱射させた。

フロントガラスに銃弾の嵐が飛び、フロントガラスに血の様な液体が飛び散った。運転手を射貫いたであろうその車は左に曲がっていくと車体は左に曲がっていき、もう1台の車を巻き込み遮音壁にぶつかった。スピードを上げていた車体は元々ボロボロになって今にも崩れそうになっていた遮音壁をぶち破りそのまま高速道路から消え失せ、大きな爆発音のような物が聞こえた。

「イピカイエークソッタレ!!」

敵に向かって罵倒するが、車はもう1台ほど残っている。ミツルは残りの車に向かって銃を撃つが、次はその車から人間が身を出し、ミツルたちの車に向かって銃を撃ち出した。

「うおっ！」

パララララ!!!!

無数の銃弾が雨のように車に飛んでくる。運転席側のサイドミラーが割れ、銃弾がヒュンヒュンと空気を切り裂きながら飛んでくる。

ミツルもすぐに身体を引っ込めるが、勢い余りそのまま倒れ込むような姿勢で後ろに下がる。
「きゃっ」
後ろにいたレムにぶつかり、後ろに下がるとむにゅっとミツルの後頭部になにやら柔らかい物が当たる感触がした。
「おっと、すまねえ」
「こ、こちらこそ申し訳ありません！」
「いやいや、ありがとうございました」
何食わぬ顔でミツルは後ろに居るレムに謝り両手を合掌させて感謝を述べているとスバルが声を上げる。
「そんな場合じゃないだろ兄貴！」
「分かってる！だが多勢に無勢なのは変わりない。このまま逃げるにしても残りの燃料が心元ねえし、弾もあまりねえ・・・」
弾を入れているバックを見ると残りの弾倉は2つだけ、荷物から引っ張り出せばいいものの、そんなことをしている暇はない。現に後ろから銃弾が雨あられと降ってきている。
もう悩んでる時間は無いのだ。

「仕方ねえ、使いたくは無かったが背に腹は変えられん」
バッグを手に取り何かを探す。そして中から出したのは丸い筒状の缶だった。

敵の銃弾は止むことを知らず引き金を引き続けた。
キュルルルルル!!
いきなり前にいるミツル達の車が蛇行し始めると敵は銃の引き金から指を離した。
蛇行してから車のスピードがゆっくりと落ちていき、やがて車はスピードを無くし、まるでガソリンが底をついたかのように道路の真ん中で止まった。
「止めろ!」
1人の男が運転手に止めるように指示をすると、車を降りて4人の男が降りる。
「周りを警戒しろ。死んだか確認するぞ。」
4人の男達は周りを確認しながらミツル達の車に近づき、サイドミラーで確認をする。中では赤い液体を頭から流し、座席に座ったミツル達がいた。
一人の男が銃でミツルをつついてみるがミツルは力なく動くだけになっていた。完全に死んだと思った男は銃を後ろに回しミツルの体を触りだす。
「へ、死んでるぜ。ち、女の方も死んじまってる…勿体ねえな…まあいい、暖かい内に犯

してやる」

と男がミツルの肩を持った瞬間、首から暖かい液体がドロドロと出ていく。鈍い痛みがまるで熱を帯びる様にジワジワと感じ、そして呼吸が出来なくなる。

「あ…れ…?」

男も何が起きたのかわからず、振り絞った最後の肉声を吐き出し抜けていく力と呼吸困難の苦しみからドサッと首から血しぶきを上げながら男はミツルの死体を出すこともなく倒れる。

「なんだ!?どうしたんだ!!?」

男たちが倒れた男に駆け寄る。死体を見てみると首を掻き切ったような切り口が首にあった。ドクドクと血が地面に流れ落ちていき、一瞬で死体の周りは血だまりが完成する。

そして疑問が生まれる。何故首が掻っ切られたのか。その理由は直ぐに理解出来た。

「ハロー」

後ろにいたのはナイフを手にした顔に血を流しているのにも関わらず、ピンピンした姿で居るミツルだった。よく見ると血が滴っているのにもかかわらず外傷が全く見当たらない。銃弾が擦った訳でも、身体を貫いた訳でも何でも無い。車からカランと音を立てて転がってくるトマト缶を目にした時、男達は銃を構えることを忘れ全てを理解出

来た。
「まさか・・・!!!!」
「ビンゴ!」
　ミツルは素早くソードオフショットガンを手に取り、ホルスターから抜き腰だめで引き金を引いた。散弾銃の弾は短く切り詰めた銃身によりバラバラに散っていき、一瞬で3人の男の体を貫いた。
　男達の身体がスクラップになっている車の車体に当たり、動かなくなる。
「愚弟の嫁候補に触ろうとした罰だ、地獄に墜ちろ・・・」
　ショットガンの銃身から撃ち終わった二発分の薬莢をはき出し、素早く次の弾を入れて銃身を元に戻す。
「ミツルさん・・・」
　後ろから同じく頭から微量ながらトマト缶の汁を流している。
「悪いなレムちゃん。死んだふりをするためとは言え、少し汁を付けさせて貰った。服には付かないように細心の注意を払ったつもりだ」
「それは別に気にはしておりません。ですが・・・」
　レムは死体達を見ている。
　血を流し続け、目から光を失った男達の成れの果てを。

「別段珍しい事ではない。感染者が現れた瞬間、確かに対抗するために人類はあらゆる手を尽くした。結局俺達の中に感染源が分かった時には世界は崩壊し、生き残りは限られた物資を奪い合い、殺し合った」

男達の服を漁り、銃の弾を手にする。

「だが、俺は仕方がないと考えてる。この世界には今や食うか食われるかしかない。食物連鎖とはよく言ったものだな」

「だからこそ、俺らは戦い、勝ち残り、生き残らねばならない。例え俺達が感染者達に敗北したとしても、誰かを蹴落として生き残らねばならないとしても、俺達の背中には、今まで生きるためにその身を捧げた犠牲者や、意思を託した仲間たちの想いを未来に残さなければならない。俺達が牛や豚、野菜を食べて命を紡ぐ様に、俺は泥水をすすろうが、その意思を捨てる気は無い…」

「ミツルさん…」

「兄貴…真面目な話に水を指すようだけど、何か拭くものある?」

レムの横でドロドロと頭から大量のトマト汁を垂れ流しているスバルに、ミツルは「はぁ…」とため息を吐く。

「締まらねえなお前は…」

「締まらなくしたのは兄貴だろ!?人の頭に思いっきりトマトスープぶっかけやがって

!!」
「わかったわかった。こいつらが持ってた水筒の水使えよ。なんかオイル臭いが使えるだろ」
「大丈夫かそれ!?ガソリンとか入ってないだろうな!?」
　そんなやり取りをしながらミツルは死体から剥ぎ取った水筒をスバルに差し出すとスバルはすぐに頭から水をかけてトマトスープを洗い落とす。
「うわ、ホントにオイルくせえぞこれ…」
　水筒から水をチョロチョロと頭からかけていくスバル。濡れた髪を車の中にある適当な布で拭いていく。
「…」
　死体から銃弾を取っていくミツルは二人目の死体から剥ぎ取り終わった頃、ある事に気がつく。
「おい！3人目の死体は何処だ!!?」
　スバルたちは先ほどミツルが撃ち抜いた三人の男を見る。死体が二つある。二人とも防弾チョッキのような物を着ているが至近距離からの散弾によりチョッキを貫通していたが肝心のもう一人の死体が忽然と消えていた。しかも男が居たであろう場所には多少ほどしか血が流れていない。これが何を意味しているのか、レムはもちろん、ス

バルも理解していた。男は生きている。
ミツルとスバルは拳銃を構えると、レムも後退し、モーニングスターを手にし、三人は背中合わせにするように辺りを警戒する。
「何処だ…！」
スバルの声が合図になったのか。
「うがあああぁぁ!!」
ミツルの目の前からナイフを持った男が飛びかかってきた。
「うおっ！」
咄嗟の事でか、ミツルは男のタックルをくらうと、後ろにいる二人の背中を押すような形をとってしまい、２人は体勢のバランスを崩してしまう。
「おわっ！」
「きゃっ！」
ミツルが倒れたところに男は馬乗りになってミツルに刃物を突き立てるが、ミツルは男の両手を掴み、ナイフを止めようとする。
「がああぁぁ!!」
錯乱したように男が雄叫びを上げる。
「く…うう!!」

ミツルも必死に押さえるが、ジリジリとナイフが胸に突き立てられていく。刃の先端が服に到達した瞬間、
「うおおおおお!!」
スバルはすぐに立ち上がり、ナイフを持った男にタックルした。
「ごあっ!!」
男の身体をスクラップ状態の車に叩きつける。
「スバル!」
「スバル君!」
「殺させない!俺の唯一の肉親を…!!!」
「このっ…!」
男はすぐに手に持っているナイフをスバルに振り下ろすために上に掲げた。だが、
「スバル!避けろ!!」
ミツルがすぐに立ち上がり、男を押さえているスバルに向かって走りだす。
「ミツルさん!」
それに合わせるようにレムも立ち上がり走り出す。二人は歩幅を合わせるように走る。スバルは二人が三歩手前まで来たところで男の拘束を解放し、その場を離れる。
「弟にぃぃ!!」

「スバル君にぃぃ!!」
「「手を出すなァァァァァ!!!」」
二人の肘が男の腹に当たり、男の身体を車にめり込ませた。ガラスの残った破片や部品の破片などが男の身体にバケツに注いだ水を頭から被ったかのように降りかかる。男は口から血を吐き出しながらそのまま気絶してしまう。
「これで、仕舞いだ」
身体に付いた埃を手で払い、ミツルは懐からタバコを出して口に咥える。タバコに火を付けようとライターを出そうとするも、横からレムがマッチに付けた火をミツルに差し出す。
「ありがとう」
ミツルはタバコをその火に近づけ、タバコに火を付け口から紫煙を吐き出す。

6話「憎悪」

死ぬこと自体が怖いと思わなくなったのはいつからか？
奴らに恐れなくなったのはいつからか？
殺すことに抵抗が無くなったのはいつからか？
人を殺すことに抵抗が無くなったのはいつからか？

「そうか…情報はこれで全部か…」
「あ…あ、あ…」
煙草をふかしながらミツルは椅子に縛り上げた男に問いかける。見ると男の両手首は無くなっており、足の指は全部引きちぎられている。
足と手からドバドバと血を流した事により、男の精神は痛みと共に崩壊した。
足元には尿水と血が混じり合い、異臭が鼻をさす。
「望みは？」
ミツルはホルスターに入れている銃を引き出し、弾がある事を確認する。

「こ…ろし…てぇ…」
それは必死に絞り出した一言だった。痛みは時に人を絶望のどん底に落とす。絶望はやがて救済を求め、望みに変わる。
「そうか…ここまで話してくれたんだ。礼儀を果たそう」
銃を男の額に当て、引き金が引かれた。

「…終わったみたいだ…」
外で待つように言われたスバルとレム。二人は蝋燭の火を頼りにしミツルの帰ってくる方向を見続ける。
レムがスバルを見ると、スバルの手は小刻みに震えていた。
「スバル君?」
ハッと我に帰ったかの様にスバルはレムを見る。レムもスバルを見つめて心配そうにしている。
「あ、ああ…悪い…」
スバルは視線を蝋燭に向けて灯火を見つめる。その表情は不安や寂しさを兼ね備えた悲しい表情だった。

「スバル君、何か怖いことでも?」
「…」
　無言のままスバルは再びレムに視線を向ける。
「兄貴が…怖いんだ」
「えっ?」
「昔の兄貴は凄く優しかった。頼んでもないのに買い物に行くと決まって俺の分を買ってきてくれたり、困った事があれば教えてくれたり助けてくれたり…でも今の兄貴は、平気で人を拷問して、殺してる」
「スバル君…」
「兄貴は凄く強い。こんな世界で兄貴は一人で戦ってきた。母さんや父さんの死を乗り越えて必死に生にしがみついた。あの時の優しい兄貴は、この世界と同時に死んだんだって、そう思えると悲しくなってきて…」
「悲しいですか…」
「…こんな世の中だから仕方ないのか…」
「そんなことないと思います」
　レムは不安に震えているスバルの手を重ねる。
「もしミツルさんがスバル君の知っているミツルさんじゃなければ、スバル君の前で

笑ったり、陽気に話しかけたりしないハズです。お父様とお母様の死を乗り越えて、ミツルさんは強くなり、そしてスバル君に再び会えた事により、ミツルさんは希望を得ることが出来た…ミツルさんにとってスバル君は希望なのです」

「レム…」

手を取り合い、スバルは涙を溜め、小粒の涙は頬を伝い落ちる。

その日の夜、ミツルは戻って来なかった。

――――ゲートが破られたぞ！みんな避難しろ！

――――なんで今になって！罠はどうしたんだよ!!

あの時、俺達は感染者の群れに襲われた。仕掛けていたはずの罠は何故か解除されていて、最短で俺達の村まで来ていた。戦力は少なく、とても感染者の群れに対処出来る状態じゃなかった。

ゲートは呆気なく突破され俺達は孤立状態に陥った。俺はその時見た。

フードを被った男を…そいつの腕には、毛が逆立ったオオカミの刺青があった。

――――あいつが…俺達の居場所を…！殺してやる…必ず殺してやる！

「ぬあああああ!!」
　眠っていてもナイフを手に取ったのは日頃の危険な生活のおかげなのか。危機察知能力によるものなのか、とにかくミツルは朝日を浴び、手にはナイフを取り、誰もいない小さな部屋の中で目を覚ます。
　部屋には異臭が漂い、隅っこには椅子に座らせロープで縛り上げた男の遺体があった。
「ふぅ…」
　頭を抱えミツルは汗を裾で拭う。
「朝か…」
　手についている血は乾き切り手から鉄のような匂いがする…。
「水浴びてえな」

　ミツルは2人の元に戻り何も言わずに朝食を用意していた。スバルやレムは何も答

えず黙って食事を取り、そしてミツルは情報交換と作戦会議が始まる。
「まずはラムちゃんの居場所を言おう。ここから西に2キロ程。奴らはある建物に閉じこもっている。トワイライトビル。以前は悪徳の金融会社だったが潰れて廃ビルになってる。しかも建物は7階建ての大型ビル、地図を見る限り、中の防備は厳重だ」
「どうやって姉様を救出しますか?」
ミツルはナイフを逆手で持ち替え、ナイフを地図に突き刺す。
「レムちゃん。戦争に必要な物は何か知ってるか?」
その言葉を聞き、レムとスバルは顔を見合い、顔を顰める。
「わかりません」
「右に同じく」
2人の言葉が終わるとミツルはタバコを咥えて火をつける。
「戦力、物資、情報、そしてどんな戦況でも立ち回れる頭だ」
「…どれも俺達に足りない要素ばっかだな…戦力? いや…まてよ…」
スバルは4つのワードから一つのワードに引っかかり顎に手を置き、考え込む。
「…別に俺達が真正面で戦う必要は無い…」
パン!
両手を合わせ小気味良い音が鳴り響く。

「その通りだ。戦力としては状況最悪敵の数は圧倒的に此方が不利なのは変わりない。だがアイツらの敵は俺たちだけじゃないんだ。なら呼ぼうじゃねえか。敵の敵を」

スバルは意を決した表情を見せると窓から外を見る。

「ん？」

草むらから何かがガサガサと何かが動く。動物だろうと誰もが思うだろう。だが違った。

「ッ！」

スバルの目に移るもの、草むらから出てきたのは黒く光る銃身。しかもスコープが太陽の光を反射して動かない。それは狙いを定めているという合図。

「レムに兄貴、伏せろ！」

スバルは咄嗟に2人に飛びつき伏せる。

パァァン!!!

銃弾が窓のガラスを貫通し、壁に弾丸が当たり穴を開ける。

「敵襲だ！」

スバルの声により戦闘意識を覚醒させ、銃に手を伸ばし、弾の状態を確認する。

「何人だ!?」

「わからない！でも2人以上だ！」

マガジンの弾を確認し、埃がついていたのかフッと一息マガジンに息をかけ銃に弾を装填させた。
「ちくしょう!どうやって位置を特定した…付けられたような気配は無かったし、車は隠したんだぞ??!……隠した?」
ミツルは直ぐに部屋から出ていき3つほど並んでいる扉の中で一番奥の部屋にいる死体の身体を見る。上着を剥ぎ取り、手をポケットの中に入れてまさぐる。
「こういうことか…!」
ミツルの手に握られてたのは小さな機械。
「GPS…!」
即席で作ったであろうその機械をミツルは握りつぶすと、あるものに気がついた。
それは、ミツルが始末した男の腕にある刺青だった。何の取り柄もない毛が逆だったオオカミの刺青。それを見た瞬間ミツルの目付きが変わった。
「どいつもこいつも…俺の居場所を奪いその上家族をさらって更には仲間を救助せず俺の弟達を殺そうってか……ふざけんじゃねえぞ!!!!」
ミツルの大声と共に、遺体の座っていた椅子に向かって蹴りを放つ。遺体は椅子から転がり落ちていった。
「兄貴…!」

「スバル…今俺達には死の危機が訪れてる。このまま黙ったまま待てば殺される事は間違いなしだ。だからこそ、俺は奴らを殺す！」
怒り狂ったようなその憎悪を孕んだ眼は、既にスバルの知ってる兄ではなくなっていた。
殺す事に満ちた殺意。銃を手に取り、コッキングレバーを引っ張った。
「スバル…レム…離れてろ…」
「ッ!!」
感情は心を移し出す。感情は身体を動かす。行動は時に非常識を起こし、以前とは別人のようになる。
「身に掛かる火の粉は振り払わなければならん…アイツらを皆殺しにしてやる…！」
その表情は、スバルが今まで見た事無い兄の顔だった。いや、その顔は兄の顔では無かった。
「（誰だ…コイツは、なにを考えてんだ俺は！）あに…き…」
必死に言葉を振り絞りスバルは震える手を兄に伸ばすが、恐怖によりスバルは手を引っ込めてしまう。腰に付けているホルスターから銃に手を伸ばそうとするが
「良いからじっとしてろ…すぐ済む…」
ミツルの言葉によりその行動が静止する。

言葉は時に言霊という物になる。言葉が時に人に感情を与える。喜びや悲しみ、熱意、意志、敬意、恐怖、憎悪

スバルは恐怖で動かなくなった。今になってわかる。魔女教徒であるペテルギウス討伐でスバルは躍起になり援軍を求めた。しかしそれはスバルの殺意による自己満足、誰も動かず、誰も手をさし伸ばさなかった。兄の顔は、あの時の自分のようだった。レムも同じく動けなかった。今までどんな相手にも臆することなく戦い抜いた。だが今回は違う。眼前の、何の力も持っていないただの人間に、恐怖した。

レムはスバルに近づき、耳打ちする。

「スバル君…」

「レム…ここは兄貴に任せよう。きっと…」

「違います…ミツルさんからスバル君と同じ匂いが…」

「ッ！それって…」

「はい、魔女の残り香です…」

２人は廊下を歩くミツルをただ見つめ続ける。静かな建物の中にミツルの足音だけが響く。

今、殺戮の鐘がなった。

「皆殺しにしてやる…！」

7話「敵」

～2年前～

それはまだ春になったばかりの頃。寒い厳しい季節を乗り切り、暖かい日差しと共に作物や木々の葉が生い茂り花が咲き始めていた頃。

「壁の補強は滞りなく済んでる。後はゾンビ達を近づけないように罠を貼ろう」

屈強な男達が何人か集まりひとつの大きな円卓の前に集まり図形が書かれた紙を見ながら話し合いをしている。

何人かの男はライフルやショットガンを担いでいる。

「それなら木を使って槍にして地面に刺しておこう。奴らは考える頭がない。地面に刺さった槍に突き刺さったところを警備が巡回して仕留める」

「よし、それで行こうか」

男達の中から一人の男は地図に指を指す。

「街の東と西の入口５００メートル方面で展開させよう。その後警備を拡大させて1キロ、3キロと槍の数を増やす。それを見た生存者に俺達がいるという確認も出来るだろう。作業は明朝から。それまで各々身体を休めてくれ」

「「了解」」

「ではこれで円卓会議を終了する」

男の合図と共に会議室を出ていく男達。そこに少し黒ずんだ服を身に着け、手は血で黒く染めてきたミツルがやってくる。円卓会議室から出てくる人々から肩に手を置かれたり「お帰り」と声を掛けられる。

「満？」

リーダーの男はミツルに気が付き近づいて話しかける。

「…親父」

ミツルは不安そうに父親の顔を見る。

彼は外に出ていた。目的は数年前から行方不明になっている弟を探すため。ミツルはこの世界がこうなる前から弟を探していたがその手掛かりは一向につかめず、こんな世界になっても探し続けていた。

「昴は？」

父の問いかけにミツルは首を横に振る。今回の探索もダメだったということ。情報は何一つなし、ミツルからしたら絶望的な状況。もう弟が生きているという真実を知るのも望み薄の状態だ。

「無事だよ。アイツはいつもそうだ…ふらっと出てきてふらっと居なくなって…いざと

いうときに機転が利く。まあ、部屋に引きこもりすぎてたがな…」
父は笑いながらそういう。腰のベルトに付いているホルスターに手を置き、顎にはやしている髭を触る。
「お前らは俺の最高の息子達だ。いつかお前ら兄弟が助け合いこの危機を乗り越えることを願ってるよ…」
父はミツルの肩に手を置き微笑む。
「親父…」
「さて、そろそろ仕事の時間だ。お前も明日また鼻を探すんだろ？ゆっくり休んでおけ」
「ああ…」
ミツルは自室に眠りにつく。この後の悲劇の足音に気がつかず…。

それはこの数時間後のことだ

カンカンカンカン！
「っ!?」
警報の鐘の音と共にミツルの意識は睡魔から取り戻し、寝ぼけながらも拳銃に手を伸ばし銃身を取りホルスターに収めベットから飛び起き部屋を出る。

辺りは暗く頼れるのは松明に付いた炎の灯と雲の隙間から覗く月の光のみ。そんな暗い暗闇の中で大声が周りに響き渡る。
「敵襲だあああ!!」
男の声と共に再び鐘の音が響き渡る。
ミツルも外に出て行き高台へと梯子を使い上ると状況確認のために周囲を見渡す。
「…」
凝らして見てみるも夜の闇が広がるばかり。そしてあるものが静かに闇月明りと共にその正体を現す。
「っ!」
そこに居たのは、数百もの歩く死体たちだった。
「ウソだろ…!」
街の壁の高台には既に大人達が武器を手に何人も集まるが、これでも勝てるかどうか見込みがない。ミツルは下唇を噛みながら武器を握りしめる。
「なぜ今まで近づいていることに気が付かなかったんだ!」
「偵察隊の連中はどうした!?」
何時もなら回避出来た状況。しかし今回に関しては何かが違った。ミツルは唾を飲み込み考える。なぜ今回はこんなにあっさりと敵を見過ごしたのか。しかしその答え

は直ぐに気づけた。前方から歩いてくる死体を見て。嫌な予感は確信に変わる。
「殺されてる…」
ミツルのボソッと声に出し、ある物を指さす。
そこに居たのは、彼らの偵察隊が歩く死体となっていた。しかも暗闇で見えにくいのもあったが遺体には目立った外傷がない。あるのは胸にある弾痕。
それが指す答えは、『他コミュニティの攻撃』
その日、集落の1つが一夜にして滅んだ。

〜現在〜
ガシャン！という音とともに男たちが慌てた様子で入ってくる。それぞれが銃に手を持ち辺りを見渡す。
「早く来い！」
男たちは手を取り合い建物の中に入っていき、男たちの人数は5人。全員入ったことを確認すると建物の入り口を固く閉じる。
「畜生！こんなの聞いてないぞ！ただの探索任務だと思ったら死体どもの群れに遭遇するなんて！」
一人の男が周囲にあった椅子を蹴り飛ばし喚き散らす。それをライフルを持った男

がそれを静止させる。
「落ち着け！生き延びるためにも全員冷静になれ！」
「冷静になれ？こっちは弾も少ない！そのうえ後ろには感染者の山だ！今命が危険に晒されているのに冷静になれだと！狂ってんのか！」
「今までも命が危険に晒されてただろう！全員弾数の確認をしろ。５分後には感染者がやってくるぞ。その前に隠し通路を使って前線部隊と合流する」
拳銃からマガジンを取り出し弾数を確認をし出す男たち。
「なら、手伝ってやるぞ」
「「ッ！！」」
不意の声にその場の全員が銃を声のした方向である暗闇の通路に全員銃口を向けた。
「撃つな！全員撃つなよ…」
暗い通路からカチャッと何かを置く音が聞こえる。そして地面に金属を擦るような音とともに大きな銃が姿を現した。
更に暗闇から二丁の拳銃も出てくる。
「いいか!?今から三人姿を現す！だが絶対に撃つな！敵意はない！」
銃を構える５人の男たちは目配せをしながら隊長と思わしき顎鬚を蓄えた男を見る。
顎鬚の男は首を縦に振るが銃を下ろさない。

「よし、姿を現せ!」
暗闇の通路に向かって大声で回答するとコツ…コツ…と小さく足音が鳴る。その音は三人分あり、暗闇から建物の隙間から入る太陽の光によりその三人の姿を現す。
「落ち着け…撃つなよ…」
そこから現れたのは、黒いジャケットに腰にはベルトに括りつけたマチェットを差している。オールバックのロングストレートの髪の毛、無精髭を生やした青年。
その青年と少し顔つきが似ており服装はジャージを着た少年。そしてその少年の傍らにいるあまり汚れが目立たないメイド服を身に纏った水色の髪をした小柄な少女が現れた。
「…感染者が来るんだって?詳しい話を聞きたい」

〜数分前〜
カシュッ
ＡＫのコッキングレバーを引っ張り銃弾を薬室に流し込み、カチッとセーフティを指で下に降ろし銃を撃てる様にする。
拳銃も同様にマガジンカートリッジの中に弾がある事を確認しスライドを引いた。
「いいか2人とも…ここを…動くな」

ゆっくりと部屋の隅を指さすミツル。その瞳は橋での戦いを退けた時と同じ、狂気と殺意を孕んだ邪悪な瞳だった。

「あに――――」

伸ばした腕は本能的な物なのか、腕を引いた。

あの殺意に手を伸ばせば殺されるのでは無いか？本能がそう危機を察知してスバルの行動を静止する。

ここで兄を行かせれば大勢が死ぬ。もしかしたら兄が死ぬかもしれない。ここで止めるべきだ。

仲間をもう失うのや嫌だ。

「兄貴！待ってくれ！」

「…スバル…ここに居ろ…」

ゆっくりと冷たい瞳がスバルを見つめる。

「ダメだ！兄貴殺しちゃいけない!!」

「バカ抜かせ…あいつらは俺たちを殺すために戻ってきたんだ…今窓から確認できた…5人だ。5人なら奇襲でもすれば一瞬であの世送りにできる…」

「じゃあ、あれも窓から見えたのか？」

スバルは窓の外を指さす。ミツルはスバルの顔をじっと見ていたがスバルの指さす

方向に瞳を向けた。
　外の生い茂る茂みがゆっくりとだが動いた。そしてうめき声。しかもそのうめき声は一匹や二匹じゃない。何十もの数のうめき声だ。
「おいおいおいおい…冗談だろ」
　死体どもだ。しかも大群でこちらの方向に向かっている。ミツルたちが見つかったという理由でこちらに向かってきているとは考えにくい。後考えられる理由はあの5人。あの5人は追われていた　そう考えるのが自然だ。あの銃も流れ弾によるものなのか？ミツルの顔からは殺気ではなく、焦りのものに変わる。
「もし奴らならわざわざ乗り込んでくる必要がないはずだ。俺たちを感染者に囲ませてしまえばいい。彼らは敵じゃない…兄貴…話し合おう…そうすればこの危機で的状況から抜け出せる」
「……」
　額にたまった汗を腕で拭い頭に手を置き壁に額を当てる。
　考える最善の策。わざわざこの建物に避難する意味…ここを通るくらいなら迂回して逃げていけばいい。この建物は廃ビルだが建物が密室しているわけじゃない。人が2～3人ほど通れるスペースもある。じゃあなぜここなのか。
「何かとっておきの武器をここに隠してるんじゃないか？ロケランとか機関銃とか…」

「いやそれはない。隠す場所がなさすぎる。そんなものがあれば俺たちがとっくに見つけてるだろ…考えるとしたら銃じゃない…」
「脱出経路があるのではないでしょうか？出なければ彼らがここを通る必要がないかと…」
　もう感染者が近くまでやってきた。長居し続けてたらそれこそ危険だ。もう一刻の猶予もない。
「二人とも、下に降りるぞ、だがスバル忘れんな、奴らが敵だと分かった瞬間俺は奴らを殺す！その時はお前も腹を括れ、相手が人間だろうが関係ない、皆殺しだ」
「…わかった」
　ミツルはスバルから目を離すと銃の弾を空の弾倉に変えてコッキングレバーを引っ張り薬室の弾を抜いた。
「この銃は奴らに渡す。警戒をされないようにな。だがスバル、お前は拳銃を渡すな。もし撃たれそうになれば銃を抜け」
「わかった」
「レムもだ、いざとなればあの氷の塊を出して奴らにぶっ放せ。生き残るためだ」
「承知しました。ミツルさん」
　拳銃のマガジンも取り出してスライドを引くと弾が宙に飛んだ。それを片手で

キャッチした後にレムにも声をかけて再度確認を取る。二人の確認を取ると拳銃のマガジンを空弾倉に変え、ミツルはリュックを背負う。

「よし…交渉するか」

～2年前～

燃え盛る家に群がる死人たち。車も燃えている。血まみれの青年の近くの地面には何体かの死体が彼の周りを囲むように倒れており、その中心には青年が拳銃を握った状態で涙を流し地面に膝をついていた。

「……」

彼はただ黙って転がっている死体たちに視線を向ける。全員の頭には銃弾で撃たれた跡があり、腕などには噛み傷があった。

「……………ああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その日、一つのコミュニティが崩壊し一人の青年は友人も、仲間も、親も失い生き残った。

そして彼は変わった。生き残るために泥水を飲み、地に這うネズミを喰らい、死人を殺し、生きるために生きた人間も殺した。

復讐の為に、彼の眼には闇が宿った。暗い暗い闇のような黒い眼はただ虚空を見つめていた。

その姿はまるで、

生ける屍のようだった。

8話「死に戻りと籠城戦」

～スバルside～

突然だが、俺は死んだ事がある。別に前世の記憶があるとか変な電波を拾ったとかそういう事じゃない。俺は実際に死んで時間を戻っている。俗に言う『死に戻り』というやつだ。これは俺がレム達の世界に飛ばされた際に得た特典みたいな物らしく、俺は何度もこの力で未来を変え、運命に抗ってきた。

そして俺は自分の世界に戻り、この力が発動した。

それは今俺達が話している兵士達に兄貴が襲撃を仕掛け全滅させた所から始まった。

「スバル！向こうを押せ！」

兵士たちを奇襲攻撃で難なく全滅させた兄貴と俺たちは合流すると入口には無数の死体共がやって来た。勿論応戦できる数でもなく、俺たちはバリケード作り何とかしのいでいたが、遂に突破されてしまう。死体共を倒していくもののすぐに弾はつき、死体の群れが押し押せてきた。

「畜生！下がれ！一旦後退するぞ！」

兄貴の声と共に響き渡る銃声。地面には撃ち放たれた弾の薬莢がカラカラと地面に

落ちる音が小さく響くが、それをかき消すように獣たちの声が耳に入ってくる。
無数の死体たちは俺たち餌を喰いにその鋭い歯をむき出しにやってくる。
「畜生!!」
弾が尽きたアサルトライフルを地面に落とし拳銃を持ち変える兄貴の横から死体が兄貴の腕をつかむ。
「ッ!!」
死体の歯は兄貴の二の腕に噛みつき、兄貴の腕から鮮血があふれ出す。
「がああッ!!」
死体の歯を振りほどき拳銃で噛みついた死体の頭を撃ちぬいた。
兄貴の腕から滴る鮮血は腕を伝いやがて手の指に達し、赤い雫が地面にポタポタと落ちていく。
「あ…あぁ…あに――――」
その時のことは死に戻った後でも鮮明に思い出す。腕を振り「先に行け!」と叫ぶ兄貴。俺の腕を取り先導してくれるレム。その光景はスローモーションのように時が進んでいるように思えるくらいゆっくりと動いていた。
最後に兄貴を見たのは、奴らに取り囲まれ、首から鮮血が噴き出ても銃を撃ち続ける兄貴の姿だけだった。

「あ…ああ…！」

ゆらゆらとあの死体どもの様に活力を失ったような歩き方をしながら俺はレムと二人で逃げた。そして俺たち二人も死体に囲まれ、俺たちが無残にも生きながら腹を裂かれ、内臓を食い散らかされた。

その死ぬ瞬間に俺の視界に入ったのは、感染したであろうレムの遺体が動き出し、そして群がる死体をかき分けて俺の肉を喰いに来た

兄貴の姿だった。

「ッ!!」

不意にその時のことを思い出し、俺は強烈な吐き気に襲われる。

「どうしたスバル…体調が悪いのか」

「いや…大丈夫だ」

のどまで来た胃酸を何とか押し込み俺は踏みとどまった。俺はあの時のことを思い出してしまった。元の世界でも死に戻りが発動し、俺が目を開けると再び兄貴が踏み入る瞬間まで戻っていた。だけど、あの感触は覚えている。腐った死体が俺の腹を割り、内臓をその手に取り口に運んで貪り食うあの瞬間を、レムが首元を噛まれ、血が噴き出て、俺を喰いに歩いてきたレムと兄貴の姿。その時俺はこの世界に絶望した。希望も何もないこの世界を…。今でも思い出す。あの死体どもに腹を裂かれた時の熱を…感覚がまだあるのか内臓を噛まれた瞬間のあの痛み…だからこそ、今回は失敗しない…！

俺たちは現在、下の階で合流した特殊部隊員たちに身体検査などを受け、武器チェックを済まされた。だが彼らは俺たちの武器を押収するどころか弾のおまけもつけて返してくれた。

向こうも人手がいるらしい。それはそうかもしれない。今外には大量の感染者の群れが迫っている。そんな中でここでやり合ってもメリットはこちらにも向こうにもない。ならお互いが特になることを考えた方がいい。

「ホラ、弾は大事にな…」

弾が入った箱を兵士が俺の手に渡しにこやかに仲間の元に戻る。

兄貴の銃を拾い兄貴に渡そうとするがその時男はつぶやいた。

「いいか、少しでもおかしなマネしてみろ…お前をもう一度お天道様に拝めなくするからな…よく覚えとけ…」
「…手元が狂わないようにしておこう…人と組んで戦うのは後ろにいる彼女くらいなんだ…」
「…なら今のうちに俺たちの顔を覚えておけ…」
銃を受け取り兄貴の目線が男の左胸辺りに行った。目線の先にあるのは男の名札だ。名前は武田明という名前が書かれている。
「…わかった、明」
明という男はフッと笑い兄貴の肩をポンポンと手を置いた。
「その調子だ」

既に隊員の三人がある部屋に移動して何かをしている。手にはバールを持っており地面のタールに軽く擦るようにからからと音を立てている。
「…彼らは一体何をしてるんだ?」
ミツルは手に持っている拳銃に弾を装填させてホルスターに仕舞いながらアキラに

問いかける。
「抜け道を探してる。ここはあと少しで腐れ野郎どもでいっぱいになる」
「抜け道？こんなどこでもあるような建物に抜け道があるのか？」
「ああ、ここは昔の大戦で空爆を逃れるために作られた防空壕だったんだ。それを俺らは使ってるってとこだ。前にここを通った時に銀髪の少女が倒れててな…あれはびっくりしたよ」
「…銀髪の少女？」
ミツルはある情報を思い出しアキラに聞いてみる。
「その少女の名前は？」
「エミリアだ…外国人っぽかったなぁ…だけど流暢な日本語も話してた。ちょいと変わった娘だったよ」
何という事か、ミツルはまるで神はまだ自分たちを見捨ててなかったと言わんばかりの笑顔をしていた。
エミリア。
スバルが渡った異世界の住人の名前。同一人物かどうか見て見ないとわからんがスバルの言っていた情報と合致する。
銀髪のハーフエルフ『エミリア』

ミツルは希望を捨てなくてよかったと安堵の涙が一雫頬を伝った。
「そうか……！そうっぁ朗報だ……！」
ミツルはさっそくこの朗報をスバルに伝えるために走り出した。
当然、スバルとレムは喜んだ。
この世界にはまだ希望がある。今日はそれが確認できた。
すぐそこに絶望が歩んできていることを忘れて。

朗報を伝え数分、バリケードを張った入り口からうなり声が大きく聞こえるようになってきた。
「不味いぞ……！」
ショットガンを持った梶原と書かれたネームプレートを胸に付けている青年が顔色を変える。
「来たぞぉお!!感染者だ!!」
大声を上げる梶原と同時に閉めている入り口からドン！ドン！と何かを大きくぶつける音が鳴り響く。

梶原はすぐに両手をドアに手を当てて全体重を使いドアを反対に押さえる。
だが、数体の感染者の力はあまりにも強い。よってバリケードを張っていても梶原の身体は少しずつ押されていく。
「くっ！」
「みんな手伝え！押さえろ!!」
異変に気付いた他の５人とミツル達はすぐに入り口に駆け付け、扉に身体を付けて押さえつける。しかし、悲しいかな、複数人の力を合わせてもその努力はまるでむなしいと言いたげに扉が押されていく。
「踏ん張れ！押せ!!」
扉の隙間から覗く感染者の手が梶原の服を掴む。
「なに――うわっ!!」
獲物を捕らえたことを理解し、感染者の腕が戻っていき梶原を引っ張り出す。
「ぐっ！」
咄嗟に助けに行ったミツルは梶原の襟元を掴んで持ちこたえさせる。
だが、梶原の身体が徐々に感染者に引っ張られていく。
「くっ…！」
人間の全力とは良くて８割しか出せない。１００％の力を出せば人間の身体が壊れ

てしまう。だが感染者は違う。感染者は死んでいるからこそ１００％の力…つまりは限界の力を使える。個体差があるが力は人間の力を上回っている。一匹のみなら何とか工夫して避けたり、掴まれたりしても対処はできる。だが不意に事で人間の力が瞬時に出るわけもなく、今は何とか今の体制を維持させるので精一杯。

しかも群れで行動している感染者たちの腕が何本かこちらを目指して手を伸ばしている。その前に今梶原を掴んでいる腕を引きちぎらなければならない。

「ぬあああ!!」

横からスバルがナイフを持った手を感染者の腕に振り下ろした。ナイフが感染者の腕に刺さり黒ずんだ血がジワッと腕からあふれ出し、ナイフを抜くと血しぶきが上がる。しかし、痛覚が死んでいる感染者にとって痛みで力を緩めることはない。切り落とす以外梶原が生き延びる手段がない。

スバルは抜いたナイフをもう一度感染者の腕に振り下ろした。もう一度抜いて振り下ろす。もう一度抜いて振り下ろす。

切り口が広がり、骨も白骨化が進んでいるのか簡単に砕けた。

「今だああ!!」

スバルの声に反応したミツルは梶原の身体を思いっきり引っ張った。すると、切り刻んだ感染者の腕は限界まで伸ばされたゴムの様にプチンと切り口から切れた。

思いっきり引っ張ったことによりミツルは勢い余り梶原と一緒にしりもちを付く。梶原はすぐに「ありがとう！」とミツルに言うとすぐに再び扉を抑え込む。
「まだなのか！」
アキラの言葉にバールを持った髪の長い青年に大声を上げた。青年の胸のネームプレートには佐々木と書かれている。
「まだだよ！どこに穴があるのかわからないんだ」
もうバリケードは限界に近い。簡易的に張った木の板はメリメリときしむ音し、亀裂が入り始めもう限界だ。
「そこをどけ！」
二人の間に入ってきたのはミツルだった。彼は胸ポケットから煙草を出し、一本咥えると火をつけて口から煙を上げる。
「それをよこせ！」
咥えていたタバコを左手に持ち、佐々木からバールと取り上げるとタバコを地面に近づける。
「何を……！」
「防空壕で外に繋がってるんなら、空気が通っている。なら、煙を立てれば一か所だけ勢いよく煙が上に向く箇所がある！」

そしてその場所は見つかった。タバコの煙は勢いよく上に上がる。ミツルはバールでその場所をこすりつけるように滑らせると…
コチッ
バールの爪が床に引っかかった。その瞬間、ミツルは勢いよくてこの原理でバールを引っ張った。出てきたのは底の知れない闇。明かりが無ければ真っ暗で何も見えないほど暗かった。
「見つけたぞ！入口だ‼」
ドドドドドドドド‼‼
同時に聞こえる銃声。ついにバリケードが破られ感染者が多数侵入していた。
数人の隊員は手に持っている銃を構えて感染者の頭に銃弾を放つ。
「クソ！入ってくんな！」
「はぁぁぁぁ‼」
レムがモーニングスターで感染者を複数人すり潰し、動かないようにするが、このビルはレムにとって戦いにくい場所でもある。部屋の範囲が狭いため自由にモーニングスターを振り回せないのだ。下手をすれば周りに被害が及ぶ。
「これ以上は…！」
「みんな！入口を見つけた！入れ！」

アキラが全員に向かって叫んだ。
ミツルもすぐに前線に戻り手に持っているソードオフショットガンを一発放った。
飛び散った散弾が感染者たちの身体を貫き、後ろにいる感染者まで頭に風穴を開けた。
すぐに銃身を折り曲げてから薬莢を取り出し次弾を詰め込み、銃身を元に戻してから再び銃口を感染者たちに向ける。感染者たちはそんなことはお構いなしといった感じにミツルたちに近づいてくる。
「下がれ！」
ミツルの指揮で全員が後ろに下がり、ライフルを持った青年が一人発砲をやめ、走り出し地下に繋がった部屋に入り、迷いもなく地下の穴に身を投じた。
それを皮切りに一人、また一人と戦線を離脱していき、残るはミツル、レム、スバル、アキラの４人のみ。
「レム！先に行け!!」
「はい！」
スバルの言葉を聞きレムはすぐに返事をする。ソードオフの発砲と共にレムが走り出した。
「次はスバルだ！」

「わかった!」
　スバルは弾切れになった拳銃に弾倉を入れ替えを交換させたところで銃をホルスターに仕舞いこみ走り出す。
　残るは二人のみ、既に目の前まで感染者の群れが迫っている。ミツルとアキラが同時に銃を発砲し三歩ほど下がる。
「…まるでターミネーターだ!」
　アキラはミツルを見ながら笑いながら言う。
「…シュワルツェネッガーか?確かターミネーター2だったか…あの映画ソードオフなんて使ってなかっただろう」
「ああ、あの映画で使ってたのはM1887だ」
　ミツルは弾を入れ替えフッと笑った。
「だが、面影はそんな感じだ」
「…俺が持ってる銃がM1887だったらな。残念だ…」
　二人は顔を見合い、笑い合った。そしてミツルは顎で先に行けと合図をする。アキラが銃を下げ通路を走り出す。
　ミツルは感染者たちに視線を戻し、両手で持っていたソードオフを片手で持ち直し、口を開いた。

「さっさと失せろ、ベイビー」

その銃声を最後に、ビルから銃声がなることはなかった。建物の中から聞こえるのは死体どものうめき声だけとなった。

ナツキ・ミツル　プロフィール

名前：ナツキ・ミツル（菜月満）
年齢：　２２歳
身長：１８５ｃｍ
体重：５９ｋｇ

ナツキ・スバルの双子の兄で唯一の肉親。社交的な性格でスバル同様頭が切れ、非常に仲間想いであり他人を想う優しい人物。状況をいち早く把握する洞察力、何を優先にすべきか判断する力や決断力、行動力を持っている。

スバルの兄というだけあり顔付きがほぼ同じだが、スバルよりだいぶ老け顔であり髪はオールバックで肩まで髪がかかり、無精髭を生やしており、浪人のようである。トレードマークは左頬に切り傷がひとつある。元はスバルと同い歳なのだがミツルが先に生まれており、スバルが消えてから５年ほど月日が流れ歳も背もミツルに追い越されている。スバルが消えてから１人で奔走しスバルを探し回ったが、同時に感染者の出現によりスバル探索を断念せざるを得なくなった。それからは嫌々感染者を殺しながら生きてきたが、ミツルのグループは全滅してしまう。それからは人が変わったように生

きるため、武器を手にした。危機的状況になるとまるで戦闘を楽しむような笑みを浮かべることがあるためみんなから戦闘狂や戦闘民族などと言われる。服装はグレーのＴシャツにその上に黒いライダージャケットを羽織っている。　下は動きやすい柔らかい生地で作られたジーパンでブラウン色のブーツを着用している。首にはドックタグが１つついているが、殆ど服の中に入れている為誰のドックタグかは本人以外わからない。

レムとはスバルの嫁候補として数えており、優しく接している。

メイン武器
アサルトライフル　ＡＫ―４７
拳銃　Ｍ１９１１コルト・ガバメント
マチェット
ソードオフショットガン
今まで使用した武器
アサルトライフル　ＡＫ―４７
拳銃　Ｍ１９１１コルト・ガバメント
マチェット

ソードオフショットガン
中折式散弾銃
サブマシンガン　ＵＺＩ
イメージＣＶ　森川智之さん
（デビルメイクライシリーズ：ダンテ）
（バイオハザードシリーズ：レオン・Ｓ・ケネディ）
番外編ポジション
普段は物腰が柔らかい性格で２Ｂｒｏ兄者さん的ポジション。本人曰く１１２３（いいにいさん）
「１１２３（いいにいさん）俺やん」
「リックです…」
「ふぉぉぉあはぁあああああああああああああああああああああ!!!!!!」
「ＯＫ！全てＯＫ!!」
「ウソだァァァァァ!!聞いたことないよぉぉ!!」

おまけ「言葉の使い方」
スバル「やべえ、なあこの特製春巻き食べてみろよ」
ラム「パク…うん、やばいわね」

スバル「なっやべえべ！」
ミツル「おいなんだその「やべえ」ってのは」
レム「あっ、これは美味しいって言うのを「やべえ」って言うらしいです」
エミリア「スバルが教えてくれて、何だか定着しちゃって」
ミツル「くだらん、言葉くらいちゃんと使えないのかこの愚弟」
スバル「いいから、兄貴も食ってみろって」
ミツル「パクッ…もぐもぐ……やべえ」
スバル「ありえねー…」
レム・エミリア「びみょー…」

番外編

番外編「ゲーム実況（キャラ崩壊）」

『いきなりどうした？』２ＢＲＯ『Ｔｈｅ　Ｗｉｌｄ　Ｅｉｇｈｔ』より
ミツル「ショレ！ぺんぺん草！セイセイソウサーソチョウＣＨＯ！」
スバル「どうした？」

『１１２３』２ＢＲＯ『ＳＣＰ』より
ミツル「１１２３（いいにいさん）　俺やん」
スバル、ラム「あはははｗ！」
ラム「貴方、そういうの見つけるの得意ねｗ」

『みんな驚いた』２ＢＲＯ『Ｆｉｖｅ　Ｎｉｇｈｔｓ　ａｔ　Ｆｒｅｄｄｙ’ｓ』より
右の扉を閉じてライトを付けるスバル。
ラム「ライトを付けるとそこに居るかどうか分かるらしいわよバルス」
スバル「あ～・・・」

なにげにモニターを開きチカの位置を確認してモニターを閉じる。
ボニー『ニ゛ャアアアアア!!!!!』
ボニーが目の前に居る。
スバル、ミツキ、ラム「うわあぁぁぁぁ!!!」
ミツキ「居たぁぁ!!」
スバル「みんなびっくりしたw！みんなびっくりしてたw！鳥肌立った～！痛ったぁ～！」

『驚いてる場合か！』2BRO『『Five Nights at Freddy's』』
ミツル「ライトをつけて　そこに居たら速攻で閉めればいいんだろ？」
何気に左の扉のライトを付けるとそこにはボニーがいる。
スバル「うわぁぁぁお!!!」
ミツル「早く閉めろ閉めろ!!」
ラム「早く早くしなさい!!」
左の扉を閉めるスバル。
スバル「もう怖い!!」
ミツル「危ねえw！『うわぁぁ!!』って言ってる場合かw！」

『あいむかみーん!!』２ＢＲＯ『Ｆｉｖｅ　Ｎｉｇｈｔｓ　ａｔ　Ｆｒｅｄｄｙ’ｓ』より

右の扉にはチカが居る。ライトを付けるとまだチカが居る。

ラム（チカ）「はやくぅ」カチッ

ラム（チカ）「バルスも来なさいよぉ」カチッ

ラム（チカ）「あいむかみーん!!」カチッ

ミツル、スバル、ラム「あはははははっｗ！」

『オールドボニー』２ＢＲＯ『Ｆｉｖｅ　Ｎｉｇｈｔｓ　ａｔ　Ｆｒｅｄｄｙ’ｓ　２』より

ふと左ダクトのカメラを見ると皮を被っていないボニーが居る。

スバル「おぉぉ!!何あれ!!」

ラム「オールドだわ!!」

スバル「えいやオールドってなにいやいや知らん知らん！カ、カメラ８にいたやｔ」

モニターをしまうと目の前にはオールドボニーがいる。

スバル「うわぁぁぁ!!」

ミツル「わぁぁぁ!!」
ラム「あー!!」
すぐに仮面を被るスバル。
ミツル「こえぇぇ!!こえぇぇよぉ!!」
ラム「びっくりした！」
オールドボニー『ニ、ャアアアアア!!!!!!』
スバル「ぴゃぁぁ!!」
ミツル「食べられちゃってるじゃん!!」

『大丈夫だった！』２ＢＲＯ『Ｆｉｖｅ　Ｎｉｇｈｔｓ　ａｔ　Ｆｒｅｄｄｙ，ｓ　２』より
目の前にオールドボニーが現れるとすぐに仮面を被る。
スバル「あっ！大丈夫だった！」
ラム「大丈夫!?」
ミツル「大丈夫だった！」
オールドボニー『ニ、ャアアアアア!!!!!』
スバル、ミツル、ラム「うわぁぁ!!」

スバル「あははは w！ギャグか！」
ラム、ミツル「あははは っ w！
スバル『『大丈夫だった！大丈夫だった！うわぁぁ!!』って w」

『当てて巻いて』２ＢＲＯ『Ｆｉｖｅ　Ｎｉｇｈｔｓ　ａｔ　Ｆｒｅｄｄｙ’ｓ　２』より

ミツル「巻いて巻いて！ライト当てて！」
スバル「おう！」
ラム「ここまでは順調ね」
ミツル「巻いて巻いて巻いて！　あた巻いてぃ！」
ミツル、スバル、ラム「あはははは w！」

『可哀想だから』２ＢＲＯ『ドカポン３・２・１』より

スバル「うわー負けたァ!!」
ミツル「この子サクッと名前奪いに来てるよ w」
ラム「まあ、バルス『ゴミ』は流石に可愛そうだから『カス』ね」
ミツル、スバル「あはははは w！」

スバル「ふ・ざ・け・ん・な！いや～確かにね、これは友情破壊ゲームだわｗ」

『ＣＨＡＫＲＡ』２ＢＲＯ『リーサルリーグ』より

スバル「オイ!!」

エミリア「スバルがはじき返した！」

ミツル、スバル「うおおおお！ＣＨＡＫＲＡ!!」←ミツルがボールを打ち返す

スバル「うおおおお！ＣＨＡＫＲＡ!!」←スバルがそのボールを打ち返す

ミツル「ＣＨＡＫＲＡ!!」←ミツルがボールを打ち返す

バァァァン!!

スバル「チャクラァァァァ!!」←打ち返せずボールを受ける。

『全てＯＫ』２ＢＲＯ『ダウンタウン熱血行進曲』より

ラムが優勢だと知るなり徒党を組むスバルとミツル。

スバル「これで！これで！」

ラム「あなたたち！」

スバル「よしっ！落ちる!!」

ミツル「おい！おい！おい！落ちろ！」

ラムが落ちるとそのすぐ近くにいるスバルのキャラに攻撃するミツル。
攻撃の連打を食らいスバルのキャラは下に落ちる。
スバル「ア、アアアアア!!!」
ミツル「オッケー！全てオッケー!!」
スバル「こいつ裏切った！最後の最後に!!」

『本当のことしか言わないから』２ＢＲＯ『Ｇａｎｇ　Ｂｅａｓｔｓ』より
スバルとミツルを早々に倒されてラムとレムだけが残った。
ラム「どうしたの最近適当なことばかり言って」
レム「レムは本当のことしか言ってないですよ」
ラム「本当の事とか言わないで。本当になるでしょそういう事言うと」
レム「〇〇〇が〇〇〇〇〇と」
ラム「ちょっとｗ」
レム「〇〇〇〇〇〇〇」
ラム「本編じゃないのよこれ！ゲーム実況なのよ！」

『そんじゃあ、またな!!』

スバル「じゃあみんないくぞ、せーの」

スバル、ミツキ、エミリア、ラム、レム「「「「またな!!」」」」」

番外編「ゲーム実況（キャラ崩壊）」その２

「最高の回復薬で回復してる」２ＢＲＯ「デットバイデイライト　ｙｅａｒ３」
スバル「最高だと思わないかラムちーの回復薬で回復してるぜ!!」

「怪奇現象でびっくり　叫び声でびっくり」２ＢＲＯ「ＤＥＳＯＬＡＴＥ」
ミツル「水水水…！」
一同は水を探すために１件の家に入ると３人は個々で行動し出す中、スバルは１階のキッチンを調べる。
キッチンに入った瞬間、スバルの目の前に人形が現れた。
スバル「わああわさああ!!!」
ミツル「うおおお!!!なんだよぉ!?」
レム「えっえっ！何ですか何ですか!?」
スバル「……これはビックリするやろ…！」

「あまいしる」２ＢＲＯ『ドカポン３・２・１』より

スバル「『あまいしる』相手陣地を自分の領土にする賄賂…ふぅううう！」
ラム「バルスクズだわ…」
サイコロの目が1になるとミツルの領地に進めるスバル。
スバル「ふぅううう!!」
ミツル「おおいいい！クズ野郎が居るぞぉ!!」
ミツルの領地に入りあまいしるを選ぶスバル。
スバル、ラム「あはははは!!」
スバル「クズは村長にあまいしるを吸わせたw！」
ミツル「クズの汁だクズの！」

「アカウント」ＧＥＳＵ４「トリッキータワーズ」
ラム「バルス、キャンディーマン使えるからショップで買っていいかしら？」
スバル「ダメ」
ミツル、レム「あはは！」
スバル「俺のアカウントだろ!!」

「電力が不足している」２ＢＲＯ「Ｒｅｍｏｔｈｅｒｅｄ†ｏｒｍｅｎｔｅｄ　Ｆａｔ

ｈｅｒｓ」
スバル「かわすぜ～！」
避けようとしたが、電力が不足している。
スバル「電力が不足している!?どういうことだ!?かわそうとすると『電力』が『不足』してるぞ俺は!?」

「効果音の違います」２ＢＲＯ「デットバイデイライト　（ＰＳ４）」
スバル「ハグの方はどちらかと言うと『どらぁん』」
ラム「トラッパーは？」
スバル「『パン！』」
ラム「えっｗ、ハグは？」
スバル「『ぱぁぁん』」
ラム「トラッパーが？」
スバル「『パ!!』」
ラム「うるさいわ」
スバル「お前言わせておいてｗ！」

「獲物の仕留め方」２ＢＲＯ「ＴＨＥ　ＦＯＲＥＳＴ」

スバル「兄貴うさぎ持ってて仕留めるから」
スバルは自分で持ってるうさぎをミツルに渡す。
ミツル「なんでそんな遠くから投げようとしてんの？」
スバル「えいっ」
槍がミツルの顔に当たる。
ミツル「うぉぉぉう！」
２カメラ
ミツル「うぉぉぉう！」
３カメラ
ミツル「うぉぉぉう！つつつ！」
スバルは一目散にミツルから逃げる。
スバル「くくぅぅぅｗｗｗ!!」
レム「あはははは！」
ミツル「おい、何逃げてんだおい（笑）」

「ソリが逃げる」２ＢＲＯ「ＴＨＥ　ＦＯＲＥＳＴ」

ミツル「ここにも１個ある…」

小石を拾おうとソリと共に移動させていると、ソリはいつの間にかミツルの手を離れていた。

辺りを見渡すがソリの姿は一片の見つからない。

ミツル「あれ？」

スバル「あれ？」

ミツル「へっ!?」

スバル「えっ？」

スバル「何してんの兄貴!!ソリどこやったの!?」

ミツル「わかんないよぉ!!」

レム「えっ、ソリ？」

スバル「目離したでしょ一瞬！一瞬目離したでしょ!!ソリ、ソリ逃げちゃったじゃないか!!（笑）」

ミツル「いやいやいや（笑）」

レム「あはははは（笑）」

スバル「ショーン!!!!!何処だショーン!!!!!」

ミツル「いやいやいや、頭おかしい人になってるから（笑）」

「落命！」２ＢＲＯ「仁王」その１
スバル「ぐあああ！ラクメィ！」

「落命！」２ＢＲＯ「仁王」その２
スバル「おぐわあああ！」
パック「ははは！落命！」

リゼロデッド×銀魂的お話し

ミツル「待でェェェェェェ!!」

狐を追って、美術館の中を走り回るミツル、スバル、レム、勝也。

軽い身のこなしで逃げる狐とは対照的に、ゼィゼィと息を切らして走る４人。

スバル「ダメだ、兄貴・・・とてもじゃないけど追いつけない！　アイツ、余裕だもん！　完全に俺らをおちょくってる！」

ペンペン、と尻を叩いておちょくる狐を目の当たりにし、頭に血が上るミツル。

ミツル「ふざけやがってェ！　絶てー捕まえてブッ殺してやる!!」

スバル「ゼィ、ゼィ、ぐ・・・ぐるじい・・・なんか全然、走っても走っても!!　前に〝!!　すすま〟な〟い!!」

勝也　――『自分では前に進んでいるつもりでも、後ろにさがっていたりする。
結局、人生なんて死ぬ時になって、たった一歩でも前進していたらそれでいいのかも・・・』

スバル「うるせェェ!!　疲れてる時にそれやられると、異常に腹立つな！　死ねよ、お前!!」
ミツル「おちつけ、スバル！　無駄な体力を使うな!!　・・・にしてもコレ、幾らなんでも進まなすぎ・・・!!」
そんなことを考えながら走っていると・・・

――ウィィィィン・・・

「・・・って、コレ！　床が後ろに流れてるぞォォォ!!」

自分達の走っている廊下の床が、高速で後ろに流れていることに気付いたミツル。
これではいくら走ろうとも、狐との距離が縮まるはずもなかった。

ミツル「ふざっけんなよ！　今までの俺の労力を返せよ!!」
スバル「ちょっ、コレ、どーすんだ!?　全然前に進まないぞ!!」

しかし、そんな４人に更なる危機が迫っていた。

――ガゴォン!!

大きな音に振り返ると、巨大な剣山のような針が無数に付いた壁が、４人の背後から迫って来ていた。

スバル「んげェェェェ!!　ちょっ、速く!!　速く前走って下さい！　串刺しにィィ!!　壁が迫ってきてる!!」

ミツル「無理をいうなァァァ!!　もう足がガクガクで、生まれたてのバンビなんだよ!!」

そんな４人の前方で、狐がひょいひょいと壁を伝って走り去っていった。

レム「!!　アレです、アレ!!　壁走り!!　バンビ!!　バンビのようにはねる!!」

それを見たミツルが、残された力を振り絞って飛び上がり・・・

ミツル「うあらぁぁぁぁ！　天よォオ、我に力ををを!!」

懇親の力を込めて、壁を蹴る・・・が、

――ズゴォ!!

鈍い音と共に、ミツルの足が壁にめり込んだ。

ミツル「いだだだだ！　股裂ける!!　股裂ける!!」

スバル「ぎゃあああ!!　何やってんだァァ!?」

壁から足が抜けなくなり、身動きの取れなくなったミツルを、他の３人が支える。

だが、そこへ更なるトラップが・・・。

――ゴロゴロゴロ・・・

「んげェェェ!!」

４人の足元をすくおうと、ゴロゴロと転がってくるたくさんの玉・・・。

すると、勝也が小銭のついた糸を投げ、照明にクルクルと巻きつけた。

勝也「みんなァ！　俺につかまるんだ！」

糸にぶら下がり、玉をかわす勝也。

スバル「勝也さんん!!　アンタ、やればできるじゃな・・・」

と、褒めたスバルだったが・・・

勝也「うげェ・・・」

糸が首に絡まり、首を吊った状態になった勝也・・・。

スバル「つかまれるかァァ!!」

宙ぶらりんになった勝也を無視して、なんとか転がってくる玉を飛び越える３人。

スバル「もう無理!!　限界!!」
レム「勝也さんも限界です!!」
ミツル「しらねーよ、あんな馬鹿やろうのことなんざ！　やべーよ！　次来たらさけきれねェ!!」
なんとか壁から足を引き抜いたミツルも、最早限界寸前だった。
だが、高速で動く床の前方から次に流れて来たのは・・・
ミツル「来た!!　ヤバイ、またなんか・・・」

――布団で寝ている老婆・・・。

レム「ラッキです、老婆です!!　これなら楽勝ですね」
スバル「つーか、なんでババアだよ!!　なんのためのババアだよ！　誰が流してん

だァァ!!」

「でも、助かったですね。一体どこの老婆なんでしょうね？」

そのまま老婆を受け流そうとする一行。

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

・・・だったのだが・・・。

ミツル、スバル「「チクショォォォォォ!!」」

無力な老婆がそのまま串刺しになるのを見てもいられず、布団ごと老婆を担ぐミツル、スバル、レム。

ミツル「なんで見知らぬ流れ者のババアをかつがなきゃいけねーんだ!?　ふざけん

じゃねーよ！　もう、こっちも限界なんだよ!!
もう次、ババア来ても絶対無視な！　もうしらねェ！　ババアオーバーな!!」

・・・と、そこへ次に流れて来たのは・・・。

ミツル「オイ！　今度ジジイ来たぞォォ!!　どーなってんだァァ!!　誰だ!?　誰のジジイなんだァァ!?」

しかし、ミツル達は既に限界をむかえていた。

ミツル「無視だ!!　見るんじゃねェ!!　これ以上荷物かかえ込むわけにはいかねーんだよ！」

その時――・・・。

「バーさん、さようなら。愛してるよ」

ミツル「ジジイいいい!!　さよならなんてさせねーぞォ!!」

そして、老人2人を担ぎ上げる3人。

スバル「隣だ!!　ババアなら隣にいるよ!!　隣で、もう1度さっきの言葉いってあげて!!」

ミツル「オイ、なんだコレェ!?　なんの嫌がらせだ!?　もう、ちょっとした大家族だぞ!　誰だァァ、コレ流してる奴!!

年寄りは大事にしやがれェ、ボケが!!」

レム「あっ!　また誰か来ました!!」

レムが、また新たに流れてくる人物を見つけた。

次に流れてきたのは、先程の老人達よりもずっと若い男性だった・・・。

ミツル「オイ、お前！　息子だろ！　ダメだろ、ちゃんと親父達見てなきゃ！」
レム「ミツルさん、よくわかりましたね！」
ミツル「目尻のあたりがそっくりだろ、お父さんと!!」

「父さん、母さん、遺産の話なんだがね、全部私がもらいうけることになったよ。まァ、アイツらもごちゃごちゃいってたがねェ・・・」

スバル「遺産の話してるよ!!　父さん、母さんがこんな状態なのに！」
ミツル「コイツは串刺しでいいな。てめーが遺産うみだせ、バカヤロー！」

だが、そこへ・・・

「バブー」

さらにもう1人・・・

ミツル「!!」

赤ん坊が流れてきた・・・。

ミツル「・・・・・・・」

それは・・・・・・。

ミツル「三世代、目尻がそっくりだろーがァァァ!!」

赤ん坊とその父親を加えた計４人の命が、ミツル達３人の手にかかっていた。

ミツル「生きろォォォ!!　どんな悪人でもなァ、子供にゃ親が必要なんだよ!!」

スバル「あわわ!!　ヤバイ、兄貴!　もう限界!!」

ミツル「バカヤロー!　俺達の肩には、家族の命がかかってんだぞ!!」

懸命に走る3人だったが、針の壁はすぐ背後まで迫っていた。

スバル「ダメだァァァ!!　死ぬぅぅぅ!!」

その時、遠くから近付いてくるエンジン音・・・そして・・・。

ラム「あーれーだびっとそん」

――ゴォシャ!!

針の壁を突き破ってきた1台のバイク。乗っているのは、ラムだった。

続かない

9話「メトロ」

暗い穴倉の中を進むというのはリスクが大きい。感染者の姿が視認しにくく、明かりをともさないといけない。今特殊部隊の皆が持っていたのは発煙筒。赤い光が小さく辺りを照らしてくれるが、それでもないよりもましだろうという程度のものだ。しかも発煙筒は光る時間がある。モタモタしていれば発煙筒がなくなり暗闇で喰い殺されるか、仲間に撃たれるか…。

ミツルたちは銃を構えながら発煙筒を手に取り小さな明かりを頼りに先に進んでいた。

全員は緊張しているのだろう。額に汗をためた状態で歩み続けていた。

暗闇の中で慎重に歩く中、あるものが全員の目に入る。

暗闇から出てきたのは腐りかけの血まみれの足。徐々にその姿は現し、腐りかけの顔から黒ずんだ歯を見せる感染者の姿。

「…俺がやる」

ミツルが声を出し、前に出ると拳銃をホルスターに仕舞いこみ腰に付けているマチェットを抜いて感染者の頭にマチェットを振り下ろした。

マチェットは感染者の頭を貫き同時に感染者の声を止める。足で感染者の身体を蹴り飛ばしマチェットを抜くと刀身には黒い血だけを残した。

感染者の駆除を終えると再び全員歩み始める。先陣を切るアキラはミツルと同じ歩幅を合わせ口を開く。

「こうなる前は何をしてたんだ?」

ミツルはアキラに向かって質問を投げかける。アキラは横眼を使いミツルを見てからすぐに前を向いて口を開く。

「…大学生だった。医学生だ…」

「…医者になりたかったのか?」

「まあ、な…世界がこんなになって、夢も、希望も何もかも無くなった」

「俺もそうだったよ。世界がこんな感じになってから、殺し、殺し、殺し…殺され…弟と再会する前まではそんなことばかりだったよ」

「なりたかった夢とかないのか?」

「…」

懐から取り出したタバコの箱を取り出し一本咥える。そしてそのタバコの箱からもう一本タバコを出してアキラに差し出す。アキラも差し出されたタバコを受け取り口に咥えた。

ライターを取り出して火を出そうと指をボタンにかざす。
「…教師になりたかった…学校の先生だ…」
シュボッと火を起こしてその火にタバコを当て、煙を口に吸いこむ。ミツルはそのまま火を起こしたライターをアキラに向け、アキラのタバコに火をつけた。
「もしこんな世界になってなかったら、夢は叶ってたのかもな」
「さあな。俺は元の世界がどうとか、もしこうならって話すことを辞めたよ…俺達が生きてるのはこの世界だ」
口から煙を吐き出し再びタバコを口に咥える。
「俺にもくれ」
梶原の言葉が後ろから聞こえミツルは後ろにタバコの箱を投げる。
「どうも」

しばらく歩くとミツルたちは壁に当たった。道は一本道でこれだけしかない。目の前には岩のみ。
ミツルも歩いている際に辺りを見渡したが回り道できる場所も分かれ道もなかった。となると考えるとしたら…

「騙したのか!?」
　ミツルはすぐに後ろに下がり拳銃を手にして銃口をアキラたちに向ける。それを見てすぐにレムも武器を持って構えるが、すぐに二人の声が上がる。
「待て待て待て!!」
「待ってくれ兄貴、レム!」
　アキラたちの部隊隊員たちもすぐにミツルの行動にいち早く気づき銃口をミツルたちに向けるが、アキラは一人だけ銃を構えず部隊員たちに腕を振り振りながら動きを静止させスバルも同じようにミツルの前に出て声を上げる。
「信じてくれ！俺たちは敵じゃないんだ。むしろ、君らのような生存者を積極的に受け入れる気でいる！」
「どうだかな。生存者たちを受け入れるのならお前らにメリットがなさすぎる！物資にも限りがあるこの世の中でどうやって生存者を受け入れを信じる人間がいる!?それを信じる保証がどこにある!?」
「待ってくれ兄貴！確かになんの保証もないけど、彼らはエミリアの名前を出しているんだ！それだけでも俺たちには彼らについていく価値はあるはずだろ!?」
「それも考えもんだ。レムちゃんのお姉さんがつかまってるんだ。拷問されて情報漏洩した恐れもある。そのエミリアちゃんという名前を使って俺たちを引っ張り出そうっ

て考えかもしれんだろ！」
「それはない！ラムに限ってそれはありえない！」
「何故そう言い切れる!!」
「俺がラムを信じてるからだ！」
スバルはミツルに近寄り持っていた拳銃に勢いよく手を伸ばし掴む。スバルのまっすぐな目を見つめ、ミツルは額に汗が伝う。少し数秒の時間が経ち、互いに膠着状態。ミツルは「クソッ」と舌打ちをしながら言うと拳銃をホルスターに仕舞いこむ。
「わかったよ」
ズカズカとアキラの元に近寄るミツルは脅すように言葉を口に出していく。
「だが覚えてろ。これがウソだったらお前を確実に殺す！何があろうと今日殺せなかったとしてもいつか必ずどこかでお前を殺す！覚えてろ」
「ああ、それで構わない…」
ミツルが銃をしまったことにより他の部隊員も緊張の糸が切れた様に銃を下ろし始める。
「…で、これからどうするんだ？」
「安心してくれ。抜け道はちゃんとあるんだ」
アキラたちは薄暗い中で何かを手さぐりに探し出す。そしてアキラが何かを手に取

り、それを勢いよく引っ張った。土の中から出てきたのは鎖で繋いでいる何か。それが引っ張り出されると土の中から何かが開き始める。
「隠し扉ですか？」
「そう、ここに我が家が繋がってるんだ」
「…我が家？」
「地上に住処を作るとなると奴らの視界に入らなければならねえからな。だから、俺たちはあるところに拠点を作ったんだ」
　開かれた地下へ続く道。だが、そこはこの薄暗い所とは違っていた。中を見ると光、外灯がミツルたちを照らし出した。

　外灯の照らされる地下道を進み数十分。ミツルたちの目の前には見たことのない光景が広がっていた。それは人だ。生きている人間たち。武器を腰にぶら下げてはいるが、皆友好的印象を受けさせる人間たち。その中には子供たちが元気よく駆け回り遊んでいる姿も見られた。

「これは…」
ミツルをはじめとしてスバルとレムも驚いている。ここまでの数日間は地獄のような生活をしていたが、この世界で初めて活気のあるコミュニティを目の当たりにした。彼らは地下道に乗り捨てられたであろう地下鉄駅に住処を作り、蝋燭の火などで光を灯している。まさに家があり、文明がまだそこにあった。
「……核戦争が勃発しても人間が生き残れるわけだ…」
正に現実は小説よりも奇なりという言葉が似あう現状だ。ここの今の現状はロシアの小説『メトロ』のようであった。
「ようこそ、我が家『メトロ』に」
両手を広げ笑顔で歓迎してくれるアキラに対し、ミツルは手を差し出した。
「…さっきはすまなかった…どうも疑り深い性格になってしまってな…」
「お互い様だろ。こんな世界だ。用心に越したことはないからな」
アキラはミツルの手を取り、互いに握手を交わす。
レムとスバルもその光景を目にし、やっと安心できた。
３人はコミュニティを見て回ることになり、現在アキラに付いている。
「生存者の数はどれくらいだ?」
「ざっと１００ちょいってところだな。兵士の数は４０人ばかりで、あとは全員労働者。

子供にも仕事を振り分けてる」
「子供にもですか？ですが、中には年端かもない子供もいますが何をさせているのですか？」
「簡単さ。遊ぶ様にって言ってる。子供は学ばせそして遊ばせる。そうすればメトロ活気があると証明させて住民を安心させてるんだ」
「学ばせるって事は、学校の様なものもあるのか？」
「ああ、学校では子供たちに勉学と生き残るための行動や色々なことを教えてる」
「相当デカいコミュニティだが、良く維持出来てるな」
「大きな勢力には厳しい掟も課せる。物資き関しても誰でも好きに取っていい訳じゃない。労働者の働きにより報酬を割り振りしてるんだ。よく言うだろ『働かざる者食うべからず』って」
「武器や食料はどんな感じなんだ？」
「武器に関しては不足はしてないな。ウチのスタッフには化学が得意な奴がいて、銃弾を作ってるし、銃器は古いものからちょいと新しいものは持ってる。食料に関しても同じだ。ここは日本で最初に感染が拡大した街。豊富な置き土産に大きな建物には大量の感染者と食料があって備蓄量にも困ってないし、家畜の豚や羊を取って食料にしてる」

アキラはミツル達の方を向いてミツルのＡＫを見る。
傷だらけな上に少し汚れが付いている。銃を見たあと直ぐにミツルを見る。
「あんたらの銃もメンテに出した方がいいぞ。この世の中信頼出来るのは自分達の仲間と銃だけだが、時に銃は弾詰まりを起こして裏切ることがある。メンテナンスをして可愛がれば、銃は期待に答えてくれる」
「ＡＫはそんな期待裏切らない。この銃は泥に付けても、土に埋まって掘り出してでも撃てる代物だ。ソ連の傑作銃なんだから…と言いたいところだが、忠告を受けることにする。これ以上アンタの信頼を裏切りたくないし疑いたくない。スバル、お前の銃をメンテナンスしてやるから預けろ。俺が掃除する」
「わかった」
スバルはミツルに拳銃を渡した。
「俺はメンテナンスしておくから、お前らはその…エミリアちゃんに会いに行け。用があるなら俺は武器庫にいるからそこで落ち合おう」
「わかったよ兄貴」
武器庫の前まで来たミツルはスバルとレムの二人と別れ武器庫の扉を開けた。扉を開けると地下に続く階段が続いていた。
武器を手にその階段を降りると中は武器の山があった。更に小さな箱まで山の様に

積んでいた。
「ほお…これは…」
　正に資材の恵み。銃弾の山だ。アキラの言っていた化学を得意とする専門家が作ったものであろう。ちゃんと銃弾には雷管もついているし、鉛弾も先端についている。完全なフルメタルジャケット弾だ
「どうだい、ウチの武器庫は」
　カウンターのような台の下から一人の中肉中背のスキンヘッド頭の男が現れる。男の手には整備したであろう綺麗なショットガンが握られていた。
　ミツルは壁に飾られているＭＰ５を手で触りながら口を開いた。
「どれもいい代物だ。しかも整備が行き届いてる」
　触っていたＭＰ５を手に取り見てみるとフレームも何もかもがまるで新品の様に輝いている。ＭＰ５を壁に置き直し、次は拳銃を手に取る。スライドを引っ張り銃弾が入っていないことを確認して引き金を引くとカチッと撃鉄が叩かれる小さな音が耳に入る。
　さらにスライドを何度か手で引っ張ったり戻してみたりと繰り返しガタ付きが無いかを確認する。
「いい銃だ」

「そうだろうとも。俺が一式手入れしてんだから」
「ここにある…銃を全部？」
「ああ、若いもんは使い方を知ってるが整備がなっちゃいねえ。銃ってのは車と同じだ。整備しないとどこかが壊れたりオイル交換してあげねえとエンジンが壊れるのと同じだ…だが、アンタも相当銃には詳しいみたいだな。お前さんの持ってるＡＫを見ればわかる」
「これか…これはもう3年くらい使ってる銃だ。物資不足でメンテナンスも最低限しかできてねえけどな」
「そうか、なら、俺が見てやろう。他の銃もあるようなら手入れしてやるぞ」
「ありがとう。でも自分でやりたい。愛着ある武器は自分で手入れしてこそだ」
「そうか、わかった。なら道具を貸してやるから使ってくれ」
　男は台の下にある道具入れを出してそれをミツルに差し出す。ミツルはその道具入れを受け取った。
「俺はナツキ・ミツルだ。アンタは？」
「ダニエル。みんなからはおやっさんって呼ばれてるよ」
「ＯＫ、じゃあ遠慮なく道具を借りるよ。おやっさん」

テープ名【眠れぬ夜】
カチッ
『□月×日　晴れ　冬の寒さもなくなり、温かくなってきた。感染者の行動がまた活発になってきた。これは推測でしかないが、奴らは冬になると行動が鈍重に感じる。逆に春や夏になると動きは活発化してきている気もする。…日に日に奴らの数も増えていってる気がしてならない。世界中に生存者は各地に散らばっているが、それを確認する手立てがない。今では愛する者は死に、その者を手にかけなくてはならない時代になった。
…ハァ…暗い話ばかりだが、今ではこれが当たり前だ。夜になれば奴らのうめき声で眠れない。朝になっても警戒は解けない。昼は物資を探し回りながら各地を徘徊。まるで感染者たちみたいにしなくちゃならん。
こうしてテープに録音しているのも、偶然レコーダーを見つけて、一人で眠れない夜を過ごさなきゃいけないからだ…体力を温存するのが一番いいが、外で徘徊してる奴ら

をどうにかしない限りそれはできないだろうな…。
ちくしょう…腕が痛むぜ…何だこの腕の切り傷…昼間に感染者と取っ組み合いになっちまったから、その時草か何かで切ったか…身体も熱くなってきたし…少し休むか…風邪を引いて死んだなんて洒落にならねえや……』
…………カシャン！…………………………
――――――――ハァァァァ……ガウ――――――――――
カチッ
テープが終了する音と共にスバルは耳に付けているイヤホンを外し手に持っているレコーダーを仕舞った。
「(噛まれても感染…感染者に引っ掻かれても感染すんのかよ…)」
「大丈夫ですかスバル君?」
横にいるレムが心配そうにスバルに問いかけると、スバルはすぐに答える。
「おう。俺は元気だけが取り柄だからな」
などと元気を装っているが、内心ではそうではない。
「(こんなオワタ式の中、兄貴は5年間も…このレコーダーを持ってた人も相当気を休めてないのに…なのに兄貴は…)」
感染者の攻撃を少しでも傷として受けてしまった時点で感染は確実。そんな中を5

年間という長い年月生活していたとなるとその気苦労は計り知れないことだ。それが一人となるとなおさらだ。だがミツルはその長い時間を生活していた。

スバルはこの数日そんな気苦労を気にせずに寝ていた自分を悔いた。それは兄ミツルが警備をしていたのもある。兄がいれば全てが安心だと思い込んだ。だが今のレコーダーを聞いた瞬間、その思いは変わった。

甘えていたんだ。

「(俺がもっと気を引き締めていれば、兄貴も重荷を背負うことはないのかな?)」

本人がいない以上これ以上考えていても仕方ない。スバルは目の前にいる少女に口を開き、声をかける。

「しかし、無事でよかったよ。エミリアたん」

スバルとレムの目の前にいるのは銀髪で少し尖った耳が特徴的な少女。異世界の住人であるエミリアだった。

エミリアはスバルの言葉に少し笑みを浮かべる。

「私も、スバルとレムにまた会えるなんて思ってなかった。でも、会えて嬉しい」

心の底からそう思っている笑顔を二人に見せるエミリアにスバルは顔を少し赤くしながら右手で頬をポリポリと掻きながら顔をそむけた。

「それにしても驚いた。ここがスバルの元の世界なんて…」

「いや、元の世界というか…なんというか…ここは確かに俺の元の世界なんだけど…こんな感じじゃなかったんだ」
「うん。それはアキラって人から聞いてるよ。賑わいがあって、活気がある街だって言ってた。変わったのは5年前からってことも聞いてる」
「できることなら、エミリアたんやレムを元の世界に帰したいけど、ゴメン…その方法もまだ見つかってない」
　頭を下げるスバルにエミリアはスバルの手に手を置いた。
「そんなこと今は良いよ。それよりも、ラムを助けてから考えようよ」
　暖かなエミリアの手を握り返すスバル。そしてその目に光がよみがえった。
「そうだな。まずはラムだ！一刻も早く取り返してやるぜ！」
　椅子から勢いよく立ち上がり腕を天井に向けてあげた。
「そうですね。元の世界に帰るにしても姉さまを置いていくわけにはいきません！」
「だな、さっそく兄貴と作戦会議だ…そうだ！エミリアたんに紹介したい人がいるんだ！」
「紹介したい人？」
「おう！俺の兄貴だ！」

スバルがエミリアたちと合流を果たしたその頃、ミツルは椅子に座り、机に置いている銃をメンテナンスしていた。自分の銃は全て終わらせたみたいで既に組み立てられている。今はスバルに持たせている拳銃をバラバラにして汚れを取り、油を刺している。

「…」

淡々と掃除をしていき、銃に付いた汚れを取り除いた布を机に置き分解した部品をカチカチと音を立てながら元の状態に組み立てた。

「驚いたな。簡単に銃の分解清掃しちまうなんて。自衛隊にでも入ってたのか？」

ミツルはマガジンを入れる前に銃のスライドにガタ付きが無いか最終確認をして終えるとマガジンを銃に入れてスライドを引いて銃身に銃弾を送り込み安全装置を付けた。

「いや。自然と身に付いた」

「それにしても手際がいいな」
「今は銃は自分の身を守るために必要なものだからな。そりゃあ必死になって覚えたさ」
ミツルは先程清掃したスバルの拳銃を手にして武器庫の奥に進んでいく。奥に何があるのかと言うと、撃ち尽くされた銃弾の薬莢と壁に当たった様な銃弾跡がある。
距離的に２５ｍ程の遠距離に感染者に似たてた案山子が立てられており、頭には鉄のバケツが被せられている。
ミツルは拳銃を両手に持ち安全装置を外し構える。
サイトでしっかり狙いを付けて引き金に指をかけた。
ダァン！ダァン！ダァン！
三発分の拳銃の空薬莢は銃身からスライド出されると足元に落ち地面に当たりカランと音が立つ。
銃身から放たれた凶弾は全てバケツに命中しバケツには穴が三つ開いていた。
「まあ、こんなものか」
拳銃に装填している弾倉を抜き取りスライドを後ろに引っ張って銃身に込められている銃弾を抜き取り、テーブルに拳銃と弾倉を置く。
「やっと見つけたぜ。兄貴！」

武器庫の入り口から入ってきたのはスバルとレムとエミリアの三人だった。ミツルは拳銃の弾をすぐに振る装填させて弾倉を入れてスバルに渡す。
「メンテナンスは済ませた。いい機会だからここで射撃練習しておけ」
銃を受け取ったスバルはすぐにホルスターに仕舞い、煙草を口に咥えたところでミツルは机において置いた銃を背負うとミツルの目の前に銀髪の少女がやってくる。
「は、はじめまして…でいいんだよね？」
「は？」
ミツルは煙草を指でつまみながら疑問を少女に問いかける。
「ご、ごめんなさい！スバルに似てるからはじめましてって言うか…なんというか…」
「あ～…」
ミツルは少しかがんだ状態になりエミリアの顔を見る。
「キミがエミリアちゃんか」
「は、はい！」
「そうかそうか、弟から色々聞いてる。弟が迷惑かけたみたいで、世話とかしてくれたんだろ？ありがとう」
頭を下げたミツルにエミリアは胸の前に手を持ってきて横に振りだす。
「わ、私の方がスバルにいっぱいいっぱいお世話になったかも！だから、お礼を言われる

ことなんて…」
「だが世話になったのは事実だ。だからお礼を言うのは、人間として当然のことだ。お礼と言っちゃあなんだが、何かあれば俺を頼ってほしいな。ま、先にスバルに頼ってもらった方がいいかもな。」
「あ、兄貴！」
　顔を赤くしながら大声を上げるスバルにミツルは口を大きくしながら笑い、煙草に火をつけだすミツル。
　そこに葉巻を吸っているダニエルがやってくる。
「おい、ここは禁煙だぞ」
「…」